教育者としての新渡戸稲造

——新渡戸稲造の研究（その1）——

武田清子

I. まえがき

—課題—

新渡戸稲造博士の愛弟子の一人である矢内原忠雄氏の新渡戸博士について書かれた文章の中に次のような一節がある。

「神が新渡戸先生を用い給うた道は，甘蔗の品種改良より出でて，人間の改良，人間の教育を生涯の使命として与えられたのであります。新渡戸博士の事業は間口が広く，色色なことに関係せられましたけれども，先生の最大の仕事は人間の教育であったと私は思います。甘蔗を植える仕事でなくして人を植える仕事，甘蔗の品種改良でなくして人間の思想の改良，精神の改良，之を新渡戸博士は生涯の事業とせられたのであります。

内村鑑三は宗教的に信仰によって日本人を新しい人に生みなおす仕事をせられた。新渡戸博士は教育によって日本人の思想を新しくすることに努力せられたのであります。」(1)

私は新渡戸稲造博士の思想と行動に非常に深い関心を持つのであるが，その理由は次の諸点にあると云える。第一に，近代日本の教育における人格的主体としての人間形成の系譜をたどる時，概括して次のように見られるのではないかと思う。A)．福沢諭吉におけるヒューマニズムの発想形態，福沢の思想における自主，自由，独立，自尊の近代的主体の観念，人権思想，あるいは，人間観を基盤とした教育思想が見られる。B)．キリスト教主義学校の人格教育，即ち，新島襄の同志社をはじめ，多くのミッショナリーたちによってはじめられたミッション・スクールなどに共通し

て見られるキリスト教人間観に基いた人格的主体としての人間形成。しかし，キリスト教の人間形成の教育は教育勅語の渙瀉と共に，国家主義的思想家たちによって迫害され，封圧されることとなった。 C)．大正デモクラシー期の教養主義。第一次世界大戦後のヨーロッパに勃興して来たヒューマニズムの思潮の影響もあって展開した自由主義思想，ヒューマニズムの思想運動が，吉野作造らの民本主義，文学の領域では白樺派のヒューマニズム文学，あるいは，哲学，思想の領域においても教養主義，人格主義が重んぜられる風潮の中で，教育も人間尊重思想や，国際協調主義に強調がおかれた。しかし，大正デモクラシーは日本における人間，および，社会の新しい改造へと開花することなしに満洲事変，日支戦争，更に，太平洋戦争を迎えることとなってしまった。 D)．敗戦によってやっと獲得した民主主義，即ち，教育勅語の無効化が宣言され，それに代るものとして，新憲法の民主主義を背景に確立された「教育基本法」によって明示された民主主義教育の方針である。それは，教育基本法の第一条「教育の目的」に最も明らかに示されている。即ち，「教育は，人格の完成をめざし，平和的な国家及び社会の形成者として，真理と正義を愛し，個人の価値をたっとび，勤労と責任を重んじ，自主的精神に充ちた心身ともに健康な国民の育成を期して行われなければならない。」

概観して以上たような系譜に近代日本における人格的主体としての人間形成の教育の流れが見られると思うのであるが，こうした系譜の中で非常に重要な，そして，興味深い位置を占める人として，新渡戸稲造の人間像とその思想と行動が浮び上ってくるのである。それは，内村鑑三と共にクラークの影響下にあった札幌農学校でキリスト者となった新渡戸がキリスト教の人間把握を基盤としながら，福沢諭吉と同様に常識的な面を豊かに持ち，日本の北大，京大，一高，東大といった最高の官立大学から，女子大学，フレンド女学校，その他，女子教育（私立学校）あるいは，遠友夜学校のような貧困家庭の労働青少年たちのための夜学校，更に，通俗雑誌を通して全国の青年男女にいたるまで実に広範囲の人々に大きな感激を与

えるといったタイプの教育者であり，しかも，彼の人格教育は大正デモクラシー期のヒューマニズム教育の土壌をつちかった人物と云うべきであろう。更に，戦後の「教育基本法」が占領政策によって押しつけられたものであるとの理由によって，池田内閣の文部大臣荒木万寿夫氏は教育基本法の改正を主張しているが，教育基本法の確立されたプロセスをしらべる時，それは明らかに日本人[(2)]によって構成された教育刷新委員会によって，主体的に起草され，検討され，総司令部の干渉なしに国会に提出されたのであった。そして，教育勅語に代るこの民主々義的な教育の方針を明示する教育基本法[(3)]の成立のために努力した人たちが，いわゆるオールド・リベラルの人々であり，しかも，その当時の文部大臣，教育刷新委員会の委員，特に起草にあたった第一特別委員会委員，，その協力者の中に，新渡戸稲造の弟子たち，彼の校長時代の一高の学生，東大教授時代の学生が多いことに驚くのである。その例をあげれば，田中耕太郎（当時の文部大臣），山崎匡輔（文部次官），森戸辰男（教育刷新委員会委員，第一特別委員会委員，翌年の文部大臣），河井道子（同上委員），天野貞祐（同上委員），高木八尺，南原繁，安倍能成，和辻哲郎，前田多門，長与善郎等の人々である。更に，鳩山内閣の文部大臣諸瀬一郎氏が教育基本法の改正を提唱した時に，烈しい反論を行い，教育基本法の擁護に努めた当時の東京大学の矢内原雄総長も勿論，はじめにもふれたように新渡戸を尊敬してやまぬ弟子であることは云うまでもない。こうしてみる時，戦後の民主々義教育に方向を示した教育基本法の思想的，精神的背景は，最近の文部大臣たちが主張するように占領政策によって外から押しつけられたものではなくて，むしろ，内在的に，日本の近代思想史，狭く限定すれば，教育思想史の中に見出すことが出来ると思えるのであり，その重要な背景の一つとして新渡戸稲造が浮き彫りにされて来るのである。そういう意味で，敗戦前の日本にあって，民主々義教育者，ことに，人格的主体の形成を教育目標とした思想を新渡戸稲造において掘り起すことは，近代日本の教育における人格的主体の形成の系譜と性格を明らかにする上に必至の課題となってくるのであ

る。以上が，私が新渡戸稲造の思想に関心を持つ第一の理由である。

第二に，新渡戸稲造の思想は，折衷主義だと云う人もあるように，いろいろの思想や諸宗教に対しても抱擁的であるが，新渡戸の思想に見出す多元主義，折衷主義は，彼の終世の信仰であり，信念としてのキリスト教とどのような関係に立っていたのであろうか？ それは，キリスト教の日本文化への土着の仕方としての内村鑑三，植村正久らに見られる否定的対決型，あるいは，海老名弾正，横井時雄，小崎弘道らに見られるような協調的妥協型と対照する時，新渡戸の折衷主義はどういう構造を持つのであろうか？ 新渡戸は狭いキリスト教界内のみならず，また，狭いインテリの範囲内のみならず，一般大衆とも親しい思想的，人間的交流を持ち，深い影響を与えたのであるが，それは日本文化の近代化，日本人の近代化という課題において見る時，どういう問題を提示するものと云えるのであろうか？ 内発性と外発性，民衆的発想とインテリの発想の一つの興味深い綜合，あるいは，結合，あるいは，一致が新渡戸においては不思議なほど自然に行われていることを発見するのであるが，それは日本における思想の在り方としても，また，近代化の方向づけとしても，一つの非常に興味深い或る暗示をするもののように思えるのである。その点を私は究明してみたいと思うのである。これが新渡戸稲造に興味を持つ第二の理由である。

第三は異文化の相互理解，云いかえれば，国際理解の問題であり，世界平和の主張にもつながる。しかし，新渡戸の世界平和の主張には戦後の平和論に見られるような社会科学的立場からの戦争の原因の究明というような観点は殆ど見られず，むしろ，人類の善意と協調に重点がおかれるものであって，そこには永遠の大切な主張を持つとは云え，鋭い分析が見られるわけではない。しかし，異文化の相互理解という点では，たとえば，その名著と云われる『武士道』における日本の精神的伝統のエッセンスの解明と，イギリス，乃至，西洋文化のエッセンス，あるいは，西洋人の良識の無意識の精神的基礎とも新渡戸の考えている，カーライルの『衣裳哲学』の講解の内容とには，私のような読者がおどろかされるようなある共通性

があるように思える。そして，私は，新渡戸の異文化，質の異った思想の理解，解釈，紹介の自由さに大きな驚きと深い興味を覚えさせられるのである。それは第二の思想的特色と同じ根において深くつながった。問題だと思うのであるが，こうした洞察，豊かな imagination に富んだ思想的態度は，異文化の間の相互理解と交流の上にもっと多くを吸収していいものだと思えるのである。これも私が新渡戸の思想に関心を持つ，もう一つの理由である。そして，こうした幾つかの特色は，彼の思想の中で不可分離につながりあって，新渡戸稲造の思想としての特色をなしているのである。そして，私は，新渡戸博士と一面識もない世代に属する者でありながら，近代日本の思想史を学ぶ歩みの中でこの人にめぐりあい，深い尊敬と興味とを覚えさせられ，この一人の先人の人間像と，その思想と行動から謙虚に学びたいという思いに駆られるのである。

「新渡戸稲造の研究」としては，

Ⅰ．近代日本の教育における人格的主体の形成——課題と系譜

Ⅱ．新渡戸稲造の思想

Ⅲ．教育者としての新渡戸稲造
　—教育活動と教育思想の特色—

Ⅳ．新渡戸稲造の人間観
　—教育思想の基盤として—

Ⅴ．近代日本思想史における新渡戸の独自な役割と意義

のような内容を考えているのであるが，本稿においては，主として「Ⅲ，教育者としての新渡戸稲造」を取扱うつもりである。

尚，新渡戸稲造の教育活動に入る前に，その生涯の歩みを，ごく簡略に概観しておこう。

新渡戸稲造は奥州の南部藩の武士の子であった。即ち，岩手県盛岡の町で文久２年（1862）９月１日，新渡戸十次郎の三男として生れた。祖父新渡戸伝は十和田湖の水を引いて三本木の土地を開墾し，農業に功績をたてたという。彼は東京英語学校から明治10年（1877）に札幌農学校に転じ，

内村鑑三と共に同校の二期生であって，クラークの大きな影響のもとにあった同校に在学中，熱心なキリスト教信者となった。農学校卒業後3年目，即ち，明治17年(1887)に渡米し，ジョンス・ホプキンス大学（Johns Hopkins University）で3年間，経済学，歴史学，文学等を研究した。この間，新渡戸はフレンド派に入り，クエーカーになったのであり，同じくクエーカー信徒の Miss Mary Patterson Elkinton（後の万里子夫人）と知りあった。その後さらにドイツに渡って，ボン大学（Bonn University），ベルリン大学（Berlin University）ハレ大学（Halle University）などで4年間農政経済学，農学統計学等を専攻した。（ハレ大学より哲学博士の学位を受く。）帰国の途アメリカに再び立寄り，フィラデルフィアにおいて明治24年（1891）1月，29歳で Miss Mary Patterson Elkinton と結婚，この万里子夫人を伴って，同年2月帰国した。

教育者としての新渡戸稲造は，明治24年(1891)より明治30年(1897)まで札幌農学校教授としてその学識と人格とをもって，学生崇拝の中心となった。（このあと暫く，後藤新平氏の懇請により台湾総督府の殖産局長となって，砂糖政策を確立した。）明治36年（1903）より明治39年（1906）まで京都大学教授，明治39年より大正2年（1913）までは第一高校学校の校長として，校風を一変，青年たちに大きな影響を与えた。農学校の同級生で生涯の親友であった宮部金吾博士は，当時の新渡戸のことを次のように語っている。「この一高校長時代は，新渡戸君の一生に取って最も記憶すべき時代の一つであったと思うのであります。博士はこの時に，単に一高一千の学生の指導者となられたのみならず，隠然として日本全国の青年の思想的中心となられたのであります。」(5) 大正2年，第一高等高校を辞し，東京帝大法学部専任教授となって，植民地政策論の講義をしたが，その他，東京女子大学初代校長をはじめ，新渡戸の関係した学校の数はおどろくほど多く，官学，私学を問わず，また，男子の教育のみならず，女子教育にも大きな貢献をした。多くの著書をあらわし，雑誌に書くなど，文筆を通して，あるいは，通俗大学，講演などを通して，ひろく民衆教育，社

会教育に資することも大であった。(教育者としての新渡戸稲造については本稿において詳述するつもりである。)

青年時代より「太平洋の橋になる」ことを life work と考えた新渡戸は『武士道』(“*Bushido, the Soul of Japan, an Exposition of Japanese Thought*” 1900) をはじめ，多くの著書をもって日本文化，乃至，思想を西洋に紹介し，また，西洋のそれを日本に紹介した。明治44年 (1911) には日本交換教授としてアメリカに送られ，各地の大学において166回も講演して日本の事情を全米国に紹介した。(それらの講演は“*The Japanese Nation: Its Land, Ist People and Ist Life*” として出版)。更に，大正9年 (1920) には59歳にして，国際連盟書記局事務次長 (Under-Secretary of the League of Nations) に就任，7年間ジュネーヴにあって連盟の仕事に従事し，国際間の相互理解，世界平和のために目ざましい働きをした。「連盟事務局の良心」と人々が呼ぶほど，連盟に高尚な精神を吹き込んだと云われ，「ジュネーヴにおいて最も愛された人」とも綽名されたという。ヨーロッパ各国の諸大学その他での講演も大きな反響をよんだ。帰国後も太平洋会議には日本代表の委員長として活躍，昭和8年 (1933) にはカナダのバンフ (Banff) において開かれた第5回太平洋会議に日本側委員長として，出席，そのあと，カナダのヴィクトリアにおいて急病のため，10月16日 (日本時間) 72歳で客死した。国際理解と平和を life work とした新渡戸博士は最後までその使命のために献身しつつ生涯を終ったのであった。氏は日本のみならず，アメリカ，ドイツ，スイスの諸大学より学位を贈られ，また著書は日英両語で書かれ，世界二十幾カ国の国語に翻訳されたのであって，文字通りの国際人であり，その影響力はおどろくほど大であった。彼は国の内外を問わず，あらゆる階層の人々に尊敬され，慕われていたのであって，その死は国内，国外を問わず，氏を父とも母ともしたう多くの人々から限りなく惜しまれたのであった。

註 1) 矢内原忠雄「内村鑑三と新渡戸稲造」昭和21年9月27日，北海道大学中央講堂にて講演。同氏著書『内村鑑三と新渡戸稲造』(日産書房刊) 所収。82頁。

註 2) 「教育基本法」改正の動向。

もっと徹底した日本人教育をするためにには教育基本法の再検討が必要だ一という池田内閣の文相荒木万寿夫氏の発言によって，今日，またも「教育基本法」が問題になっているが，荒木文相がはじめて教育基本法の再検討を言明したのは，1960年8月19日の全国都道府県教育委員長，教育長会同臨時総会の席上でのことであり，その後，中国地方や北海道などの遊説，記者会見などにおいても所信を明らかにした。荒木文相が教育基本法の再検討を主張する論拠としては主として次の二点が問題になるように思う。その第一の点は，教育基本法は占領軍によって押しつけられたものだということである。荒木文相は「教育基本法は占領時代に押しつけられたもので，国情に合ったものに改正したい」(1960年9月8日，於中国ブロック市町村教育長研究協議会。「朝日ジャーナル」1960年9月25日号記載)，「教育基本法は占領軍に押しつけられたもので，当然いまは再検討の時期にきている。」(1960年9月14日・読売新聞)，「現在の教育基本法は，占領政策の一つで，誤った方向でスタートした。」(1960年9月9日・朝日新聞) 等と述べている。第二の点は，立派な日本人をつくるためには現在の教育基本法にうたわれた教育の目的，即ち「教育は，人格の完成をめざし，平和的な国家及び社会の形成者として，真理と正義を愛し，個人の価値をたつとび，勤労と責任を重んじ，自主的精神に充ちた心身ともに健康な国民の育成を期して行われなければならない。」では不充分である。日本人としての明確な意識と誇りをもった人間をつくることが大切だということである。それは，荒木文相の次のような発言にも明らかに見られる。「立派な日本人をつくり，諸民族から“敬愛”される人間を教育するには，教育基本法をはじめ，戦後の制度は物足りないのではないか」(1960年8月20日・朝日新聞)，「教育は人間をつくることにあるが，とくに日本国民を愛して文化を尊重し，世界諸民族から尊敬されるような立派な日本人をつくることが大切だ。その点からみると今の教育基本法は憲法同様にどこか物足りない点がある。内容自体は結構だが，日本人意識が薄くどこの国の基本法だかわからない「(同9月26日読売新聞解説)。

しかし，教育基本法の改正ということは，荒木文相にはじまったことではない。鳩山内閣の文相清瀬一郎氏も既に1955年（昭和30年）12月6日の衆議院文

教委員会において教育の内容改善に関する発言をしており，更に，1956年2月22日の衆議院内閣，文教両委員会審査会において，教育基本法を改正したい意向をはっきりとうち出している。「現在の教育制度は占領時代のものでふさわしくない。一日も早く改革の必要がある」と前置きして，現在の教育について不満な点が三点あると云い，その第一点を次のように述べている。「第一は目標で，現在教育基本法の八つの中には道徳目標がない。日本国民としての忠誠も親孝行も書いてない。教育家の中には，孝行の必要なしといっている者もいるのでこの点検討すべきである。」

清瀬文相のこうした発言に対しては，第二十四回国会臨時教育制度審議会設置法案審議にさいし，昭和31年4月4日，参院内閣・文教連会審議会における参考人として出席した，当時の東京大学総長矢内原忠雄氏が，次のようと云っておられる。「教育基本法は御承知のように戦後における日本の教育憲法とも称すべきものであって，民主主義教育の根本を掲げておるものであります。……教育基本法によって民主主義的な人間の人格観念を養成するということが最も急務であり，それに基いて，あとは特に言わなくても，親に孝行，国に忠誠ということが自然にできてくることである。……それがにわかに改正される。……清瀬文部大臣が言われたことの中に，民主主義だけではいかんと，民主主義プラス何かが必要だというふうに言われております。そのプラス何かということが，私どもにとっては非常に危険に感ずる。そこにこの戦争前の国家主義というふうなものが顔を出して来ますと，せっかく戦後始まりました民主主義の教育理念，教育基本というものがゆがめられ，水増しされ，あるいは力を失ってくる危険がある。」

註　3)　教育基本法の成立過程を史実的に実証する資料は幾つかあるが，その最も要を得たものに，東京大学教育学部教授，勝田守一氏の「教育基本法はどうしてできたか」があり，更に，最近東京大学の宗像誠也教授，鈴木真一氏らのまとめられた教育基本法に関する資料集（日教組刊）もある。また，当時，文部省の要職におられた国際基督教大学教授，日高第四郎氏の「教育基本法は日本人がつくった」（『日本の教育のあゆみ・ねらい・よりどころ』ＩＤＥ教育選書13に収録）と題する文章は貴重な資料である。即ち，教育基本法の原案は教育刷新委員会（これは約五十人の日本の専門家によって構成され，日本の今後

の教育について全般的な研究をした）の第一特別委員会の委員元京大教授羽溪了諦，衆議院議員芦田均，一高校長天野貞祐，広島大学学長森戸辰男，前早稲田大学総長島田孝一，元天文台長関口鯉吉，元文理科大学学長務台理作，元恵泉女学園長河井道子の諸氏によって非常に苦心してつくられ，それがさらに教育刷新委員会総会において充分検討されたこと，この教育刷新委員会には，明白に自主性が認められていて，アメリカのオブザーバーも，その代理としての日本人のオブザーバーもはいっていず，委員は全く自由に討議したこと，文部省の役人はこの委員会に列席はするが，きかれたら答弁するだけで，積極的に発言してはいけないことになっていたこと，法律案として国会に出すにあたって，教育基本法のばあいは，総司令部から何の干渉もなかったことが明確に記されている。そして，日高氏は，「もしあのなかにほんとうに，日本人の魂がはいっていないとすれば，それは，日本人の気概が足りなかった大責任であり，もしあれが，よくできているならば，それは，日本人の貢献であります。」と述べておられる。これは「教育基本法」が日本人によって，主体的，自主的に作成されたものであることを実証する一つの資料である。

尚，この第一特別委員会（昭和21年9月23日より発足）の速記録（文部省に保存）を詳読してみると，教育勅語をどう取り扱うか，今後の日本国民の教育方針を示すものとして，再び天皇に勅語を出してもらうか，国会が採決する教育基本法を作成するかについてなかなか方針が立たず，デリケートな話しあいを繰返している。新憲法の精神を国民に理解させるために新しい教育勅語を賜わってはという意見が相当強い中で，森戸辰男委員，山崎匡輔文部次官らが「新憲法にふさわしい教育内容を将来勅語で戴くことは相応しくない」と主張し，旧教育勅語を無効化し，「教育基本法」を作成することによって，それに代行させる方向に委員会の協議を進ませるため，非常な努力をはらっている。（こうしたプロセスとそこにふくまれた問題については別に改めて取上げたい。）

当時，文部大臣であった田中耕太郎氏は，当時を回想して，筆者に次のようなことを語られた。自分は個人的には教育勅語の内容は，自然法に基くものとして普遍的価値をもつものと確信するが，これが日本国民の教育の唯一の根本とされ，しかも現在の主権者である君主の命令という形式で国民に与えられていることは誤りだとして，勅語からこうした優先的地位を奪って一つの歴史的

ドキュメントとするために，教育勅語の無効化に努力した。また，この無効化は総司令部の命令が発せられてから日本側が動いたのではなく，参議院では既に無効が認められていた後，司令部より教育勅語無効を宣言せよとの要求があり，衆議院ではその決議をし，参議院では再確認をしたのであり，更に，勅語に代るものとして「教育基本法」の原案が教育刷新委員会で作成され，検討されたが，法律で教育の目的をきめるのはおかしいが，少くとも軍国主義や国家主義を防ぐための砦としての意味を持つものとしてその法成化につとめたと。これも当時教育方針に関する日本人の主体的動きを物語るものであろう。

また，昭和21年夏から秋にかけて学問・文化・教育の組織に関係して，自由主義者と目され，また当時の文教政策にも発言力をもつ人々が集って，一般的な文化や学問の在り方とともに，教育の基本的な方向を見きわめるために語りあった。それらの人々は，安倍能成，天野貞祐，大内兵衛，田中耕太郎，高木八尺，小宮豊隆，務台理作，和辻哲郎，谷川徹三，武者小路実篤，志賀直哉，長与善郎，柳宗悦らの諸氏であった。（勝田守一「教育基本法はどうしてできたか」による。）これらの人々が，教育刷新委員会でも有力な発言をなした人々だということである。また，ここでの討議が文部大臣の田中耕夫郎氏を通して文教政策に投影して行ったことは想像に難くない。

註　4）鶴見俊輔「日本の折衷主義」『近代日本思想史講座』第三巻，「発想の諸様式」に収録。

註　5）東京女子大学同窓会，同学友会編『新渡戸稲造先生追憶録』13頁。昭和8年11月18日新渡戸博士葬儀の際，宮部金吾氏に依って朗読された文より。

II. 新渡戸稲造の教育活動

新渡戸稲造の教育について親しくその教えを受けた人たちの書かれた文章をよむと，そこにはひとしく，「内面的な人格（personality）の完成」「才能よりも品性，理智よりも霊性」，「to do よりも to be」といった点に強調がおかれたことが記されている。森戸辰男氏（広島大学長）は新渡戸の教育者としての特質として次のような諸点をあげておられる。(1)

1. 内なる可能性を培い育てようとする自由教育家（liberal education）

2. 教え子に対する強い同情を物心両面に持ち，人類共通の深処である悲しみの聖殿に参して吾々に兄弟と呼びかける教育者
3. 正義と愛にもえた不羈独立の人格の育成，教養ある一個の人格としての人間の育成につとめる人間育成者。

河合栄次郎は，次の三点をあげている。(2)

1. 広い意味での理想主義の鼓吹者，人格の権威を教え，物質に対する精神の優越性を説く教育者。
2. 婦人に対して自覚を促し，男性に対して女性の地位を向上させた女子教育のための功労者。
3. 外は外国に対して日本を紹介し，内は日本人に対して偏狭な排外主義や軍国主義を矯めて，国際心を喚起した。

教育者としての特色をもっと巾広く横にひろげてゆけば，新渡戸の場合，無限にひろがってゆく可能性がある。それほど彼は関心と活動範囲の広い人であった。しかし，誰もが共通して先づあげるのは人格としての人間の育成ということであり，日本の教育思想史において新渡戸は終始一貫して内面的，霊的な人格（personality）の確立の大切さを主張しつづけ，教育活動にそれを一貫して実行しつづけたということである。

教育者としての新渡戸稲造の人間像，その思想と行動の特質を掘り起すために，先づ彼の教育活動の諸側面に光をあててみることとしよう。

A．高等教育の目的
——その中心としての人格主義と教養主義——

新渡戸稲造は非常に多くの学校に関係しているが，彼の本職は，札幌農学校（北海道大学の前身，明治24—30年），京都帝国大学（明治36—39年），東京帝国大学（明治42—昭和2年）の教授をし，第一高等学校の校長を8年間（明治39—大正2年）も勤めたことにあったのであって，文字通り日本の官立学校の教師であり，また，代表的な高等教育の場の教育者であった。ところが，彼が教育に力を入れて学生たちを指導する時，これらの学

校は日本の官立学校らしい学風を失って，もっとも官立学校らしからぬ学風に変ったと云われる。それは，ことに一高の場合に見られるのであって，弊衣破帽の東洋豪傑風の学風を一変した。従来の一高の籠城主義と新渡戸の人格主義，進歩主義とをめぐって，「校風論」が学生の間にしきりに論じられ，剛健の気風が軟化させられてしまうのではないかという杞憂をもって，新渡戸校長不信任問題まで起ったということは，当時学生であった人たちによっていろいろに語り伝えられるところである。(3)

それでは，新渡戸は高等教育の目的をどのように考えていたのであろうか？

彼は先づ，当時の日本の教育を明治39年（1906）の「我が教育の欠陥」という文章の中で次のように批判している。「我政府が教育上に於ける施設の多大なるはこと否むべからず。明治年代の教育方法は，維新前の教育法を継承せるものに非ずして，全く新軌道を取れるものなれば，其事業の宏大なることも亦た否むべからず。此新教育制度の成功の量の大なることも，亦た否むべからず。されど吁其成功や過ぎたり矣。今日の教育たるや，吾人をして器械たらしめ，吾人よりして厳正なる品性，正義を愛するの念を奪いぬ。一言にして言わば，これぞ我祖先が以て教育の最高目的となしたる，品格ちょうものを，吾人より奪い去りたるものなる。智識の勝利，論理の軽業，あやつり，哲学の煩瑣繊微，科学の無限なる穿究，此等は只だ吾人を変えて，思考する器械たらしむるに過ぎざるものなりとせば畢竟何の益かある。」(4)

新渡戸は決して天皇制的絶対主義権力に対立する思想を持っていたわけではない。むしろ，忠君愛国をも強調する愛国者であった。（こうした問題は「新渡戸稲造の思想」を取扱う際に充分に掘り下げたいと思う。）しかし，ここには近代日本の教育に対する新渡戸の鋭い批判が見られる。ふりかえって見れば，福沢諭吉らの唱えた自主・自由・独立・自尊の開化主義教育は明治10年代に国教主義的修身教育思想の勃興と共に，近代日本の学校教育からだんだんと閉め出され（その功利主義，立身出世主義は富国

強兵，忠君愛国の国家主義と結合して残ったが,)，更に，明治23年10月教育勅語が渙発されたあとは，所謂「国家と宗教の衝突論争，などを通して，キリスト教の人間教育が，国家主義，忠君愛国主義に反するものとして国家主義者たちから迫害を受け，日蔭者の立場に追い込められたことは周知のことである。そして，森有礼の検定教科書（明治19年)，教育勅語に基いた修身教科書の編纂，第一次国定教科書の成立（明治36年）などを通して臣民としての人間像が確固とした日本国民の教育目標となって行ったことも今更云うまでもない。富国強兵のスローガンのもとに物質面のみにおける西洋の近代技術を輸入しつつ近代国家の形成にいそがしかった日本は，日清・日露の戦役を経過して近代産業国となり，大日本帝国の基礎を増々かためたかに見える時期が，新渡戸が第一高等学校の校長になった時期である。そして彼はわが国の教育が，知識や科学にのみ重点をおき，人間を器械にしてしまい，厳正な品性，正義を愛する念を奪ってしまっていると，きびしい批判的態度で教育の仕事にまむかっているのである。

それでは彼は「教育の目的」，ことに「大学教育の使命」をどのように考えていたのであろうか？　早くに彼がこの主題について論じたものとしては，まだ未熟で散文的ではあるが，明治40年刊の『随想録』に収録された「教育の目的」があり，更に，よりまとまったものとしては，昭和3年，国際連盟事務次長[(5)]の席を辞し，久方ぶりに日本に帰った折り，欧米各国の大学の伝統と現実とをつぶさに観察し，大学の在り方について考察した成果とも云うべき早稲田大学での講演「大学教育の使命」，および，「大学教育と職業問題」（昭和8年刊『内観外望』に収録）に見られる。

彼は先づ，従来の日本の教育が，福沢諭吉の慶応義塾，中村敬宇の同人社，等民間の学校もあるが，主として高等教育は官学であったこと，および，それら官学の教育目的は役人の養成にあったことを批判した後，「学問の目的」について次のように述べている。学問は，それがどのような動機によってなされるにせよ，一度び，学理とか学問を授けると，それが必ず人の心をエマンシペート（emancipate）し，リベラライズ（liberalize）

するということは否むことの出来ない事実だと云う。たとえ学問の目的が役人を造ることであろうとも，結果としては，学問を受けた人間の心は liberalize される。自分のように技術を重んずる農学校に学んだものでも，鋤や鍬や肥料のことだけで他のことは考えないでいるわけにはめかない。「一度学問をすれば，心のエマンシペーション，即ち，心の解放というよりは，むしろ啓蒙という方がよいと思うが，心のエマンシペーションを受け，また，自由な，リベラライズされる精神を植えつけられた。」(6)と云い，「この心をリベラライズするということ，エマンシペートすることが，私は学問の第一の目的だと信ずる。」と云っている。(7)

このように，学問の目的を心の解放，啓蒙，自由化と規定した後，彼は，アメリカ，イギリス，ドイツの大学教育の目的を対照的に論じる。

第一に，アメリカの大学教育の目的は efficiency と能率にあると云う。もっとも伝統的に見れば，アメリカにおける普通一般の学問は，純良なる公民，good citizen をつくることが目的であった。大学教育は，単に良民ということだけでなく，良民，即ち，良き公民の指導者をつくることにあった。College の教育はいわゆる liberal education であった。アメリカの大学教育の目的は精神の liberal な人をこしらえることにあった。しかし，それは，伝統的に云ってそうだったというのであって，今日のアメリカ（新渡戸の当時）は，農業時代を過ぎて工業時代に入って来つつある。こうした状況にあって，職業教育，専門教育にだんだんと重点がおかれることとなり，efficiency，有能さ，能率に重点がおかれるようになって来た。生き馬の眼でも抜こうというような社会の競争によく耐えうるような人を沢山つくりつつあると云う。

第二に，イギリスの大学は人間を造ることに重点をおく。人物本位であって，職業（profession）よりも人間を先づ造ろうとする。教育を受ける者は，己を全うすること，人格の建設を第一義とすると云う。新渡戸は，イートンの学校，ウィンチェスター，ラグビーの学校がどのように紳士的態度を養うことに努めるかをも強調して述べている。

第三に，ドイツの大学教育の目的は，客観的な真理の究明にあるように思う。「人間そのものということでなく，形而下の学問をしている。即ち，物質的の学問である。そして物の真理を究めよう，新しい物を発見しようとしている。その努力は，物質的方面に限ったことではなく，その研究心の旺盛なことから，延いて哲学であれ，歴史であれ，研究に研究をして，今まで人が知らなかったところの事実を証拠立てようとしている。いささか人間離れのした物そのものの研究に力を注ぐということが，またドイツの高等な学問の使命のように思われているのである。」(8)

新渡戸はドイツの大学に一番長く学んだ人間でありながら，自分にイギリスびいきの傾向の強いことはよく認めている。しかし，彼はハレ大学の統計学の大家が，ドイツでは，その時その時の経済状況によって学生の専攻する専門課目に移動を生じる。即ち，経済状況がよければ，経済志願者多く，経済上のクライシスには経済志願者が減少する。地方制度改正がはじまると法律の志願者が増すという面白い研究を公にしたことを引用し，学問そのものに熱心であるかのように見えるドイツ人にこうした現象が起るのは，「全くのところ己ということをやめて，目的を客観的におくところから来るのではないかと思う。その外に目的をおくというのも，理窟からいえば，何だか真理を研究することになりそうであるが，そこに，己というものまでも外において，人格はどうでもよいといったようなところから，今述べたような現象が起るのである。」(9) と云い，日本でも同じ現象が現われつつあるのではないかと云うのである。新渡戸は勿論，ドイツの大学教育の強調する学問的真理の究明を軽視するのではないが，人格としての主体の形成から切断された客観的物の世界のみの真理の究明に対しては，。「専門だけの専門家は人間として片輪だ」と鋭い批判を向けるのである。

新渡戸は，真理の発見，仕事の efficiency，人格の建設，この三つの目的が一緒に達し得るなら，それほど結構なことはないという。しかし，それらが一度に達成出来ないなら，先づ，「自分は何のために学問をするの

か」を先づ自ら見きわめること，即ち，自己の問題（主体の自覚の問題）からはじめよと云う。何処に自己の人間形成の根拠をおくかを見きわめさせることこそ，大学教育の使命を決する根本的な課題だと新渡戸は確信するのである。大学は culture を体得させ，人間としての根抵，あるいは土台をつくる所だと云う。彼の教育目的はあくまでも人格形成を根本としており，それを基礎としての学問の真理の究明であり，専門教育なのである。

勿論，新渡戸がこうして人格の形成，人間をつくることの大切さを主張する時，いわゆる人間中心の個人主義の立場に立つものではない。彼は，人間を vertical（垂直）な関係と horizontal（水平）な関係においてとらえており，一方，人間を超えたところにあるもの，水平的関係を全く離れて，人間以外のあるもの，即ち，神，との縦の交りを持つことの大切さを「一高倫理講話」(10)の中で強調している。聖書に "In the world, but not of the world"（この世にあれど，この世のものならず）とあることを指摘し，人間以外のもの(神)との交りとしての瞑想 meditation を持つ者こそ，大なる確信 conviction を与えられるのであり，vertical relation を持つ人間は個有の香りを持つと云い，人には強要しないが，新渡戸自身は信仰を基盤とした人格主義の立場をとるものである。

彼はカーライルの『衣裳哲学』の講義(11)の中でも，カーライルという人の特徴は transcendentalism（超越主義）だと云い，「人間をただ人間として見ない，soul として見る。衣服は見ない，衣服をとってしまって essence として見る。人間から技芸というものを取り去り，人間から名誉とか，学問とか，衣服とか，位階とか，勲章とかいうものを皆省いて man himself を見る。(insight)」ことにあると云っている。「象徴」(symbols) の章(12)でも，世の中の事は何事も symbol であって，精神的のものに真実がある。真正のもの，実在は隠れてあり，symbol はその実在の revelation である。symbol の真の意味を理解することは understanding のみでは出来にいのであって，もう一つ深いところにある力，悟道（彼は fantasy

とも云う）によらねばならないとも述べており，その見えざる実在にささえられ，それによって意味を与えられるものとしての人間観を非キリスト者である学生たちにわかる表現で明らかに示そうとしている。(13)

更に，「奴隷制度」の章では，世の中で最も尊敬する者が二人ある。（三人とは居ない。）その一人は労働者であり，もう一人は精神に欠くべからざるパンのために働いている人だと云い，人々のために働く労働者について書いている次の文章は，精神的，霊的人間観にもとずいた他者に対する深い関心と責任感なしには生れて来ない思想である。それは，カーライルのものであると共にそれを三十回以上も愛読した新渡戸自身の思想でもあったと思えるのである。「この地上に道路をこしらえ，この地球の生産物，即ち物質をこしらえ，機械を以てこの地球を征服し，地球を人間のものにしてくれる。仕事の為に使われている労働者は，その手を見ると堅くなっている。その堅い手が私の非常に尊敬するところである。……我々がお前の為に平伏して御礼を言わないで，ああ気の毒だと思うのは，それこそ実に気の毒なことである。……お前の腕の節が太くなって形態を失っているのは一体誰の為なんだ。おお我々の為ではないか。……僕の為に食物をこしらえてくれる人を崇めると同時に不愍と思わせるような社会の組織は，おかしいものではないか。」(14) こうした考え方は，あとでくわしく触れるが，北海道に労働青年たちのための夜学校をつくり，日本におけるセツルメント運動の先駆をなした事実と深くつながっていると思えるのである。

新渡戸が校長になって一高の校風が一変されたと云われるが，彼は別に学校の組織や寮制度などを変革したのではなかったようである。従来からあった倫理講座を，新渡戸が受け持ち，（その内容は，矢内原忠雄氏が，「これが，俗にいう修身とは違って，非常に潤いのある人生観や世界観など教える話をされた。もちろん試験も何もないんです。それが大へん啓発した」(15) と云われるような内容のものであった。）特別講座を設けてカーライルやゲーテやリンカーンやミルトンなどについて自由に講義し，学校の近所に一軒家を借りて，週一回学生たちとの面会日の personal な語りあ

いなどを通して，上記のような思想を伝えて行ったのであり，それは一高生たちの思想に大きな影響を与えたのであった。

当時，第一高等学校の学生たちがどういう思想を持っていたか，そして彼らに新渡戸の思想がどのように浸透し，一高の校風をどのように変えて行ったかを知る上に，貴重な資料として，第一高等学校寄宿寮編『向陵誌』(大正2年）があり，そこに収録された矢内原忠雄「弁論部部史」，秦豊吉「文芸部部史」が非常に興味深い。

新渡戸の前任校長で新渡戸とは対照的な風格をもった古武士的な教育者狩野亨吉校長（明治31年11月—明治39年7月）の時代にあっても既に個人主義の抬頭が見られるのであって，一高の籠城主義との間に校風論をめぐっての論争がだんだんに盛んになってゆくプロセスが興味よく見られる。「文芸部史」は明治34年頃より，「個人主義の超梁」などという言葉が愛寮家の間にしきりに用いられ，一部寮生の間におこって来た個人主義に対する非難が表明されていることを伝えており，個人主義の抬頭がうかがえる。明治36年にはかの藤村操の自殺があり，真面目な青年たちに大きな衝撃を与えた。「弁論部史」はこう記している。「藤村操君は十六才十カ月のうら若き身を以て巖頭之感を残してあわれ華厳の瀑に玉砕しぬ。沈滞せる社会は愕然として或は怒り，或は嘲笑せり。然れども之が為め真面目なる青年はその思索的良心の琴線のいたく振動するを感じぬ。」同36年の「文芸部部史」も「陳套なる校風論衰えて宗教的，文芸的趣味に移らんとす」と書いており，明治37年になると俄然個人主義の主張が強くなって来るのであり，「此期と次期とは吾が文芸部史に実に an epoch を作るべき時代なりとす。AGE OF REFORMATION とす。其中心思想を個人主義（ニイチイズム或はイプセニズムと称するを得べし）として，其中心主導者を魚住影雄氏とす。(彼は若くして死んだ。) 芸術の権威の主張により文苑の解放せられしも此時代とす。堂々と皆寄宿制度廃止説の論ぜられしも此時代とす。」(p. 95) と云い，阿部次郎の「理想冥搜の態度」(138号）が旧思想に対する個人の自覚の叫びとして，reformation の最先鋒であったと記して

いる。阿部は「内観して我が至深の要求を明にすること」「眼をあげて我が至深の要求を充す可き実在を探ること」,「此の実在と融合一致するを努むること」を一切から解放された自己のゆくべき道として指し示した。前田多門の「真の自覚」も見られる。魚住影雄の「個人主義に就て」(142号)は次のような主張を行っている。「個人主義は個性主義なり，個性主義は人を人として見，制度の奴隷をなさざる主義也。或者は個人主義を以て壊疑主義,破壊主義,又は利己主義となす,何ぞ然らん,人を知らんとする者は先ず我を知らざるべからず。……又個人主義を以て非社会主義とし客観的意識を欠ける者となすは個人なるもの，人間なるものを知らざるなり，見よ世界史上最も個人的意識明瞭なりし基督，釈迦は最も博愛的，平等的，社会意識に富みしに非ずや。我を知りて人を知り，社会を知り，団体を知る，自己より外界に向うはこれ個人主義の取る道なり。」(弁論部史)。安倍能成，鶴見祐輔らも個人主義を論じたようである。

しかし，当時の一高においては，籠城主義者たちの勢力は依然強く，彼らは，個人主義は校風を危うくするものだとして，暴力による攻撃をも加えまじき雰囲気であったという。

新渡戸校長が明治39年10月，今村老校長のあとに新校長として新任したのは，こうした相異る校風論の相せめぎあう時期だったのであり，新渡戸のように，はっきりとキリスト教に基いた人格主義的個人主義ではないまでも，個人主義の萌芽は既に一高生のふところに芽生えはじめていたことがらかがえるのである。そして，新渡戸は暖い人柄と快いユーモアとをもって人格としての人間の大切さを考えさせ，また「籠城主義と Saciality」などの文章によって，籠城主義の独善的な高慢さにおちいり勝ちな危険を指摘し,謙虚に他者と人間的,精神的に交る Saciality の大切さを説いた。所謂校風論者は籠城の根底を害うものとして憤り，校長批判を行うものもあったらしいが，忍耐強く学生たちを説得した。「木下校長の下に紅燃ゆるが如き武士的気慨を養い，狩野校長の下に沈毅篤学の風起りし我校先徒は今や新渡戸校長の下に精神的積極的に性格を修養せんとす。而して弁論

部は最初より心を傾けて新校長を迎えぬ。」と弁論部史には記されている。(17)

当時の第一高等学校の『向陵誌』をよむ時，素朴ではあっても，何かルネサンスかリフォーメーションの胎動のような気が感じられるのであるが，新渡戸はまさにそうした当時の学生たちのふところにうづく人間形成への課題に方向づけを与えるために用意された教師であったかの観がある。ことに弁論部の先輩，前田多門，鶴見祐輔らをはじめ，順次その部の中心をなして行った芦田均，三村起一，森戸辰男，膳桂之助，沢田兼三，河合栄次郎，河上丈太郎，三谷隆正，矢内原忠雄らの人々が新渡戸を尊敬し，彼に傾倒したことから，弁論部は最も新渡戸の思想的影響を受けることとなった。そして，彼らは，その活発な弁論活動を通して，また，人間的接触を通して，一高の学生全体に思想的影響を与え，校風を内側から変えて行ったのであった。

「今や弁論部は著しく宗教的，内的に赴き死を思い，謙遜なる信仰を語り，客観的に外界の事を論ずること少く，従って自然直接の寮政治にも遠ざかれるやの観なきにあらず。……森戸氏が，『一日の花』に於て個々の使命の尊きを述べて小者弱者の犠牲に及び，最後に，『賢明なる諸君は高位高官を得て社会を指導するの人たれよ，不肖予の如き緑深き谷辺に人知れず咲いて人知れず散る一本の百合の花とならん，一日限りの百合の花は五月の園にいと麗し，たとえその日に斃れ死すとも光輝の草と花とにてありき』と叫びしは当時わが部の思潮を最も能く代表せるものなり。平凡人の犠牲，ふさき清き生涯，専ら to be に向いし当時の部員諸氏を有するは我部の最も光学ある頁の一たり。校風論を多く関する所なしと雖もその志す度は人生の大問題自ら森風の美を飾れるものなり。而して其の弁舌や信仰の声を詩と音楽に乗せて行くも流麗花の如きものありき。」(18) と若き日の矢内原忠雄氏は情熱をこめて書いておられる。そこには「真摯と純潔と自由の精神」にみちた品格を育て上げ，そうした価値を生きぬこう，とする青年たちの志が清く涙ぐましいまでにみちあふれている。彼らは一高内のみならず，他校の弁論部とも連合の会合をもち，自分たちの信念をのべ

伝えることに努めたのであり，それは一つの生々とした青年の思想運動としての気迫にみちるものであったことが感じられるのである。そしてそれは，日本の旧制高等学校にやがて一般化して行った教養主義の最も純粋なものの原型だったのではないかと思われるのである。

森戸辰男氏の筆者に語られたところによると，弁論部では従来主たるテーマは，国家主義，あるいは，立身出世や社会的成功といった課題（それを新渡戸は“to do”だと云った）であったが，この頃から，弁論部員間のテーマは外面的経論の問題から内面的教養の問題に移り，夕闇の迫るのも忘れて，to be か to do か（内面的の人格完成が大切であるか，外面的な社会的活動や業績が大切か）というような問題を論じあい。そして人生問題に関する真面目な考察を学ぶようになったとのことである。(19) 新渡戸が弁論部と同様に奨励した「読書会」も同様であった。彼らを導いた思想の中核になるものは，人格主義的，個人主義的教養主義と云えるであろう。“to do”よりも“to be”を追求する態度であった。しかし，新渡戸における“to be”の追求としての人格主義的教養主義（当時は「修養」と云った）は，“to do”を切り捨てたものではなかった。むしろ新渡戸は実践家であった。実践の真の目的と意義を究明することが“to be”の意味を追求する課題だとも云えよう。そういう意味で，観念論的な教養主義とは明らかに区別されねばならないのであり，そこにも新渡戸の教養主義の特色があったと云える。

新渡戸の実践性が単なる閉鎖的個人主義と全く異っていたことは，彼の社会性（Sociality）の強調においても明らかに見られるところであろう。Vertical な関係にささえられた horizontal な関係の重視，さきにふれたカーライルの『衣裳哲学』の講義において自分の最も尊敬する人間の一人として労働者をあげていること，大学教育の一つの重要な問題は社会に対する責任感を養い，社会の正しい秩序のために奉仕出来る人間をつくることだと云っていることにも，彼の社会に対する関係は明らかに見られる。矢内原忠雄氏は『私の歩んできた道』の中で次のように語っておられる。

「先生はおのずから，人間とか人生とか，……パーソナリテイー人格，それから，社会的意識とでも今ならいうんですか，ソーシャルな意識について話をされた。新渡戸先生は早くからアメリカの社会主義者や経済学者の本，それからヘンリー・ジョージの『進歩と貧困』なんか読まれた。先生の話されたのは，社会主義というよりも個人を単位とした社会的連帯，社会的意識ということだったと思うんです。その面会日に私も行きまして，まあ個人的には非常に教えられた。新渡戸先生からの思想的影響というのは相当深いですね。人間とは何であるか，人間の魂の悲しみとか喜びとか，あこがれとか，そういうことについて目を開いてくださった。」(20)

超国家主義の強暴化してゆく中で社会主義を唱え，あるいは，正義と平和の国家の理想を主張し，あるいは，自由主義を堅持することによって，国家当局の弾圧を受けて，大学を追われた森戸辰男，矢内原忠雄，河合栄次郎の諸教授がすべて新渡戸の実践的な思想的影響下に育った人たちであったことは重要である。(21)

思想史的に当時を概観すれば，日露戦争の後，即ち，明治40年前後からの日本人は一体に，それまでの国家至上主義思想に対して反動的な思想を抱き，個人主義的，自我主義的な考え方，感じ方をするようになった。そしてそれは，やがて大正デモクラシー運動の展開となり，「白樺派」などの文学活動ともなり，また，知識人の間に教養主義，文化主義，人道主義などとよばれるヒューマニズム運動が生み出されて行ったことは周知の事である。大正文化は個人主義的「教養」という観照的概念でよく説明される。この教養という概念は日本では儒教的な修養という概念に代ってあらわれたものであって，その背後には，明治末年の自然主義の流行による儒教的生活形式の崩壊と西洋文化の急激な流入があったと云えよう。よく引用されるのであるが，三木清は『読書遍歴』の中で「教養の観念は主として漱石門下の人々でケーベル博士の影響を受けた人々によって形成されていった。阿部次郎の『三太郎の日記』はその代表的な先駆で，私も寄宿寮の消灯後蠟燭の光で読み耽ったことがある。」といっているように，教養

派の人たちは，漱石からも影響を受けると共に，ケーベル Raphail von Köber（1848—1923）から西欧的教養と学問的訓練を受けた人たちであった。ケーベルは明治26年（1893）東京大学の招聘によって来日し，大正3年（1914）まで21年の間，西洋哲学，ギリシア語，ラテン語などを講じ，多くの学生にしたわれ，思想的に影響するところ大きかった。雑誌「思潮」によった阿部次郎，和辻哲郎，などはそれを代表する。さきにふれた『三太郎の日記』の外，和辻哲郎の『古寺巡礼』（大正8年），『日本古代文化』（大正9年），などは典型的な産物であった。これらケーベル門下の人々の教養主義は，人格的実践的関心よりも知的文化的関心に特色があり，本来信仰の対象であった古寺古仏を美術品として美的鑑賞として取り扱う（『古寺巡礼』）という態度に明らかなような性格のものであり，人格主義も観念的な内面省察に終り，歴史形成力としての実践へと主体をつき動かしてゆくような dynamic なタイプの思想ではなかった。

そういう意味では，大正時代の教養主義には，ケーベル門下のそれと，新渡戸稲造を中心とした教養主義との二つの対照的な流れがあったと見るべきだと思う。そして，後者は内にキリスト教信仰をふくめ，それに基いた人格形成，教養を追求したのであり，しかも，そこからの「実践」の具体的目標と方法とは夫々の個人の課題として新渡戸は答えることをせずに残したのではないかと思えるのである。（こうした点は，「思想」のところで詳論したいと思う。）

こうした教育の理念は，必然的に，大学は職業学教をする場所だという考え方を認めない。さきにもふれたように，彼は「専門だけの専門家は人間として片輪だ」と云うのであって，大学をして人間教育を忘れた技術教育，職業教育の場とすることに断乎として反対するのである。「高等教育の目的というものは，職業を得るためのものとは思われない。それぞれ職業に必要なる学理のプリンシプル，一般的基礎的知識を得るということで，職業教育そのものは，間接に受ける結果といわなければならない。今後どのように時勢が変るか知らぬが，もし大学なるものが職業を得るため

の道行となったならば，大学は下落し，堕落するものだと思う。[22] と断定するのであって，「職業がなくてもくよくよしない。職業がなんだ！ という広い心持を養いたい。」[23] と云うのである。

以上のような新渡戸の高等教育，乃至，大学教育の目的に関する主張は，彼より40年近くおくれて生れ，30歳の若さでシカゴ大学の総長となり，アメリカの機械的技術文明と，それから生じた誤った科学主義，あるいは，職業教育に対して，誰よりも果敢な批判をなし，新しい教育理念を提唱して大学の大改革を行ったハッチンズ（Robert Maynard Hutchins 1899—）博士の教育理念と類似していることに驚くのである。ハッチンズはギリシャ時代より現代にいたる西洋の偉大な思想家たちの大著述（Great Books），即ち，人類の偉大な精神的遺産から偉大な精神の力を学ぶことを基礎とした general education，あるいは，liberal education によって，人間が自分でものを考え，自分で判断し，選択することの出来る自主的な個性的な人間の教育を強調した。彼はその著書 "The Great Conversation" の中で次のように書いている。「自由教育の目的は，人間として，また市民としての人間的な優秀性にある。それは，人間を手段でなく，目的とみなし，人生の手段にこだわらず，人生の目的に目を注ぐ。こういうわけで，自由教育は自由人の教育といえるのである。」[24]

ここには新渡戸のそれと殆ど同様の教育理念が見出せるのである。東西のこの二人の偉大な教育者は期せずして，高等教育に関して同様の見識を持っていたのであった。（ここでは事実の記録にとどめ，こうした教育理念の意味づけ，乃至，批判的分析は「新渡戸の教育思想の特色」のところでまとめて取扱いたいと思う。）

更に，近代日本において，大学の使命，大学教育の目的，学生の教養などの問題を論じ，戦前，戦後を通して大学教育の在り方に本質的な問題と方向を提示して来た人々の中に，河合栄次郎，田中耕太郎，森戸辰男，南原繁，矢内原忠雄のような当時の一高，東大に学び，新渡戸の指導を受けた人たちが多いことは興味深い。

註 1. 『新渡戸博士追憶集』(前田多門・高木八尺編) 所収。森戸辰男「教育者としての新渡戸先生」(pp. 338—348)

2. 同上，河合栄次郎「新渡戸先生の思い出」(pp. 357—358)

3. 石井満『新渡戸稲造伝』pp. 226—284

4. 新渡戸稲造「我が教育の欠陥」(明治39年3月)，『随想銀』(明治40年刊)に収録。p. 16

5. 同上 pp. 319。ここでは教育の目的のおきかたを，職業，道楽，装飾，真理探究，人格修養の五つにわけて論じ，学問の最大，かつ，最高の目的は，人格を養うことだと強調している。

尚，明治19年の「帝国大学令」が大学の目的を「国家ノ須要ニ応スル」としたのと対照して，大正7年に改正された「大学令」が「国家ニ須要ナル……」のあとに，「人格ノ陶冶」を附加しているのは，当時の新渡戸らの大学論と無関係とは云えないのではなかろうか？

6. 『内観外望』p. 315.　　7. 同上

8. 同上 p. 336.　　9. 同上 p. 338.

10. 「一高倫理講話」(9月26日)『新渡戸博士文集』 pp. 926—298

11. 高木八尺編『新渡戸先生講演衣裳哲学』

12. 同上 p. 35　　13. 同上 pp. 171—179

14. 同上 p. 181—183

15. 矢門原忠雄『私の歩んできた道』 p. 5.

16. 『向陵誌』(大正2年) 中，矢内原忠雄「弁論部部史」 p. 129。

尚，安倍能成氏が直ちに感想文を書き，「いつわり多き我，真摯ならざる我，願くは君が導きに待たん哉」と云い，魚住影雄氏は「自殺論」を書いたと云い，「真面目なる同窓青年の心琴動く，我論壇亦その声を伝えざらんや」と同部史は記している。

亦，同36年の「文芸部史」には，石原謙氏の「現代の思潮を論じて精神的校風に及ぶ」(131) も紹介されている。(p. 95)。

17. 同上 p. 144。　　18. 同上 p. 149。

19. 森戸辰男「教育者としての新渡戸先生」『新渡戸博士追憶集』p. 329。

なお，ついでながら，大逆事件の直後，徳富蘆花が招かれて一高に来て「謀叛

論」の講演をして問題になったが，それを主催したのは一高弁論部であり，新渡戸校長の許可をえて芦花のところへ交渉に行った委員は当時の学生，河合栄次郎，河上丈太郎らであった。大逆罪で死刑になった幸徳秋水らを国を憂えた志士と呼び，「諸君，謀叛することを恐れるな，生きることは常に謀叛することだ。自己に対して，また周囲に対して。」と蘆花の語った「謀叛論」の講演が大きな問題となり，新渡戸校長の進退問題にまでなった時，河合，河上の両委員は自ら責任をとって辞めると申し出た。ところが，新渡戸校長は「君達学生はそのようなことは心配せず，勉強に専念しなさい。この集りに許可を与えたのは私なのだから，校長としての私が責任をとって対処するから」とやさしくなぐさめ，自らは文部省に辞表を提出したのであった。こうしたことは学生たちに深い感銘を与えた。それは，今日なお，矢門原忠雄氏や河上丈太郎氏らが深い感動をもって語られるところである。

20.　矢門原忠雄『私の歩んできた道』pp. 5—6。

21　新渡戸の実践性の思想的影響を受けた者としては，こうした社会主義的，或は，自由主義的学者の場合だけでなく，工場災害防止のために努力する三村起一，何ごとにも積極的に対処して道をひらいてゆく生き方を深く学びとったという一万田尚登らのように，60代の実業家たちにも多いとのことである。(前田多門氏談)。

22.　「一高倫理講話」『新渡戸博士文集』p. 367.

23.　同上　p. 366.

24.　田中久子訳『偉大なる会話』(岩波書店) p. 108.

なお，同じくハッチンズ博士の「自由のための教育」"*Education for Freedom*"（初版は戦時中，即ち，1943年に発行，戦後今日まで10版を重ねている。）の中には次のような文章も見られる。

「われわれの直面する問題は，道徳的，知的，精神的な問題なのである。『豊穣のさ中に餓死する』という矛盾は，われわれの直面する難関の性質を物語るものだ。この矛盾は，技術とか科学のデータによって解決されないものである。もし，何等かの解決の道があるとすれば，それは叡知と徳性によるほかはないであろう。そうしたわけで，叡知と徳性が高等教育の目的ということになる。……人間とは何であるか，ということを究明しないで，どうしてわれわれは人間の究極を語ることができよう？　人生の目的を究明しないで，どうして人間を人生に即するように教

育するなどということを口にすることができようか？……

決的な誤りは，どんなものでも他のものに比較してみて，より重要であるということはないという考え方，また，善なるものの間に序列はあり得ないし，知的域領において序列はあり得ないという考え方にある。そこには中心になるものもなければ，従って周辺に来るものもない。第一義的なものもなければ，第二義的なものもない。基本的なものもなければ，外面的なものもない。すべてをつなぐ組帯となるものが存在していないために，教科課程（カリキュラム）は支離滅裂である。その善悪を判断する規準を持ち合せていないために，枝葉末節，凡庸，職業主義などというものが幅を利かせる。健全な課程に取って代るものとして，われわれは，人格（personality），Character，偉大なる教師などといった教育無用論のスローガンぐらいしか提供するものを持ち合せていないのである。」

『偉大なる会話』（岩波書店）pp. 24—27.

なお，西洋社会において，大学教育（高等教育）の目的の再検討が活潑になって来たのは第二次世界大戦中から戦後にかけてのことである。ヒットラーとの斗いのさなかにあって，西洋社会，ことに，イギリス，カナダ，アメリカなどにおいて文明の本質，知性（理性）やそれの生み出す科学と人間社会との関係，価値の問題などが深く反省され，大学の使命は何であるかを論じ，問題を提起する重要な書物が戦中から戦後にかけて幾冊か公けに出されている。それらのうち代表的なるものに次のようなものがある。

Adolf Löwe: *The Universities in Transformations*. London, 1940

Arnold S. Nash: *The University and the Modern World*. New York, 1943

Karl Mannheim: *Diagnosis of Our Time*. London, 1943

A. John Coleman: *The Task of the Christian in the University*. New York, 1947

Sir Walter Moberly: *The Crisis in the University*. London 1949

ナッシュの "*The University and the Modern World* のために，ラインホールド・ニーバー（Reinhold Niebuhr）は序文を書いているが，そこに次のような一節が見られる。"Mr. Nash has opened a mcst interesting discussion in this book. It is his thesis that the modern university has built its curriculum and elaborated its educational procedures upon the basis of

an inadequate philosophy. It has assumed that the scientific method and spirit are an adequate guide in the pursuit of knowledge. The difficulty with this assumption is that science as such can have no sense of the meaning of life or of history. It must therefore either seek to develop an "importiality" and "objectivity" which remains neutral to all "values" and every sense of meaning by which men integrate their individual and collective life; or it must covertly insinuate some faith into a supposedly presuppositionless culture"

上記の書物は戦後世界各国の大学において広く読れまたのであり，大学問題研究会が各国において持たれるようになった。ことに，John Coleman の "*The Task of the Christian in the University*" は世界キリスト教学生連盟 (World Student Christian Federation) につながる Movements を通して，世界各国の大学の実情とそこにある問題の比較と検討からはじめ，多くの大学論の著書の提起した問題をもふまえて John Coleman (トロント大学教授) によってまとめられたものであり，これは世界各国の大学のキリスト者教授，および，学生の間にも最も広く読まれ，討議のテキストになった書物である。この本の序文に Robert C. Mackie (General Secretary of WSCF) の次のような言葉が見られる。"Amidst all the questions which the events of the war raised in the minds of the students the most persistent and widespread was the question of the university itself. What is the purpose of the university? Why does it seem so often to fail in that purpose? What relation has the teaching and common life in the university to Christian faith and the community? The discussion began some years before the war but it reached its peak ofinterest at the moment when all values were being tested in the field of battle or in the struggle of resistance." (Sept. 1946 Switzerland).

第二次世界大戦の戦斗のさなかにあって，また，レヂスタンスの苦斗の中にあって，ヨーロッパの青年たちは，すべての価値が試みられていることを痛感させられたのであり，それが，こうした大学教育の本質の検討へと展開されて行ったことは興味深い。その外，最近のものとしては次のようなのがある。

Charles Morris: Varieties of Human Values, Chicago, 1956

Philip E. Jacob: Changing Values in College Students, New York, 1957
John E. Smith: Value Convictions and Higher Education, New Haven, 1958

B. 女 子 教 育

—女性の人格的，社会的独立—

近代日本における女子教育の発展過程において，文明開化に対する国家主義的反動が強まって以来，女子教育の目的を良妻賢母におく立場が一貫して支配的であったと共に，他方，福沢諭吉，巖本善治，あるいは，諸々のキリスト教主義学校（明治時代に創立されたキリスト教主義学校は約56校であるが，そのうち女子の学校は42校である。）の教育などによって代表されるところの，婦人の人権，あるいは，人格を尊び，男子と同等の立場を獲得させようとする婦人解放思想をうちに含んだ進歩的な教育思想の流れがあったことは勿論である。

しかし，たとえば，福沢諭吉の婦人論，あるいは，女子教育観を考えてみる時，彼が，時事新報に掲載した「耶蘇教会女学校の教育法」にも書いているように，ミッション・スクールなどにおいて，表面的にのみ西洋風をまねる弊風のあることをにがにがしく批判することなどはうなずけるのであり，全体として，彼が婦人解放に果した役割の大きさは充分に評価していいと思う。

私は日頃福沢諭吉と新渡戸稲造の類似性と相違とを常に興味深く思うのであるが，女子教育に関しても二人は夫々に熱心に論じている。福沢の女性論は，彼の儒教批判の一部をなすものであり，「女大学」的女性観を徹底的に打破することであって，女性もまた一個の人間として男子と同等の人権を持つことを主張したのであった。彼がその生涯を閉ぢる直前まで手がけた最後の著作が「新女大学」であったこともその関心のほどを物語るものである。しかし，彼の婦人論は，一夫一婦論，妾廃止論，男の不品行のきびしい批判など日本の男性の不品行や横暴に多く向けられていて，女性を男尊女卑の不平等な思想および，社会的，家庭的立場から解放するこ

とにひたすらむけられている。また，男に遊廓などにゆくなというのも，動機論よりは，むしろ，悪い病気を得て子孫の健康を傷うというような結果論でそれをいましめている。また，そういうところにゆくにしても大ぴらにゆくのでなくて隠してゆけ。悪いことだ，恥しい事だと思って隠して行っているうちにだんだんゆかなくなる——と云った風に功用的効果的説得の仕方である。このように，福沢の婦人論は多分に日本の男子の教育のために書かれているということも云えよう。

それでは，婦人自身の在り方や教育についてはどういう考えを持っていたかというと，裁縫や料理がよくでき，ぬか袋の縫い方，ながしの上手な取扱い方などもよく心得た，育児も賢明にできる，いわゆるよき家庭婦人を理想としているようであって，高い教育を受けることや，社会に出て働くなどということはむしろ好まなかった。官学に対して私学精神を誇った慶応義塾も男子のための学校であって，福沢ほどの教育者が女子教育のための機関は何一つつくらなかった。また，遊女を禽獣だと云いながら，何故彼女が遊女にならねばならなかったかということや，遊女自身も人間らしくあるためにどのようして救われるべきかというようなことは問題にしていない。

新渡戸もまた婦人の解放に深い関心を示したが，その態度は福沢のそれと実に対照的である。彼は，むしろ，巖本善治のような女子教育者に相通じる面を持っていたように思える。巖本は，フェミニストで，虐げられたものに対する同情をもって婦人に深い関心を持ち，女性を男子に隷屈的な立場から，即ち，封建的ないろいろの桎梏から解放しようと，『女学雑誌』によって啓蒙運動をなし，「永遠の女性」と云ったロマンティックな女性観を普及した。また，同時に，彼は，画期的な自由主義教育に貫かれた明治女学校によって，女子教育に独自な貢献をした。しかし，巖本をはじめ『女学雑誌』，『文学界』の仲間に共通したロマンティック[(2)]な女性観は，それも発生の契機をキリスト教から得たものであったとは云え，新渡戸のクエーカーの信仰にささえられた人格主義のそれとは，根本的には相異るも

のがあるように思えるのである。

新渡戸は，教育学者でもなければ，女子教育の専門家でもなかった。しかし，女子教育にこれほど深い関心を持った人は珍しいのではないかと思えるほど，彼は女子教育に深い関心を持ち，また，そのために終生大きな貢献をした。

新渡戸の女子教育への関心は，彼の亡き母への愛に深くつながっており，また，西洋の女性に比べる時，余りにも不幸な日本の女性への同情と，彼女らをその不幸から解放したいという切実な希いに基いていたようである。明治17年（1884），22才でアメリカに渡り，Johns Hopkins Uuiversity に学んでいた頃の「日記」[(3)]にも殆ど毎日，日本の女性の解放のためにつくしたい，女子のための学校をつくりたいなどと真剣に書きつづっており，同地のクエーカー信徒の婦人 Mrs. Scull らは，彼のその熱心さに動かされて，将来日本に伝道を行う場合には女子の学校をつくろうという決意をせしめられたのであり，それが後にフレンド女学校の創立への準備のスタートとなったと云われる。

しかし，彼の女子教育への関心が，「高等教育の目的」の項でも見て来たような，「人間」そのものへの深い愛情に基いていたことは云うまでもない。

元東京女子大学長の安井てつ女史は新渡戸博士について次のように語ったということである。「新渡戸先生は実に不思議な力の有ち主であった，子供はもとより如何なる年令の者でも，如何なる階級，如何なる職業の者にでも，また男性でも女性でもすべて先生に接すれば直ちになつかしみを感じ，慈愛を感じ，そして信頼の心をおこすのである。」[(4)]と。また，新渡戸がよく学生や多くの人々に書いて与えられた和歌に次のようなのがあるという。

僅かなる庭の小草の白露をもとめて宿る秋の夜の月

どのようなささやかな小草の白露にも月は光をやどす——神はどのようなささやかなものをも一人一人限りなく愛し給う。そういう考え方で婦人

の解放と成長の問題をも見ようとする態度が根抵にあることを先づ指摘しなければならない。従って世間から爪弾(つまはじ)きされる，手のつけられないような婦人，罪悪の原動力と思えるような婦人にしても，現象のみから攻撃することはできない。むしろ，彼は何によって彼女が道を踏み外し，そういう人間になったかということから考えれば憎むことが出来ないと云うのであり，あらゆる境遇の婦人たちが全国から新渡戸のところへ身の上相談の手紙をよこしたが，一人一人に親身な相談相手になってやっていたという。彼が『婦人画報』（東京社）や，『婦人世界』（実業之日本社）といった通俗的な婦人雑誌に毎月書きつづけたのも，気の毒な婦人たちに対する助言をし，指針を与えることに使命を感じたからであった。『婦人世界』誌上に発表した文章に加筆して出版した『一人の女』（大正8年7月，実業之日本社）の序文に次のような一節が見られる。

「私の友人で，女性に深い同情を寄せている人がある。その友人のところへは，さまざまの婦人がいろいろの相談を持ち込んで来る。私のところへも相談に来た婦人もある。……私はこれらの婦人のことを見るにつけ，はた聞くにつけ，婦人に対する考は愚か，人生観まで多少変って来た。ともすれば，私どもは世を果敢ないもののように観ずるが，それは誤っている。たとい，千人の敵があろうとも，隠れたる真の同情者が一人あれば，その大敵に対抗するのはさまで難事ではない。」

新渡戸はこのようにしていかに多くの日本の婦人が不幸の中に若しんでいるかを知り，また，「日本ほど離婚の国はない」と慨嘆するほど離婚が多い現実を見る時，彼は婦人に自尊心，即ち，独立独歩の精神と独立して生活の出来る実力を養うことの必要を痛感した。大正14年に書いた「女子独立論」の中でも，良妻賢母主義を批判し，それも結構だが，そう云うなら，男子も良父賢夫でなくてはならない筈だと云い，従来女子教育と云えば，良妻賢母といって，妻たること，母たることにのみ重点をおくが，それは誤っている。不幸になっても自己をささえてゆくだけの独立する力を養うことを少しも考えていない。女子教育の方針を根本的に改めなくては

ならないと云い，独立独歩の精神と共に，如何なる場合にも困らぬよう女子に職業的教育を施すべきだ，独立するだけの教育を施さなければならないと強調している。(5)

婦人の問題，あるいは，女子教育に対して大体以上のような立場をとる新渡戸は，具体的に近代日本における女子教育にどのようなかかわり方をしたであろうか？　先づ彼が直接，間接に関係した女子教育のための学校あるいは，教育機関の名をあげてみると，東京女子大学，津田塾，北星学園，恵泉女学園，フレンド女学校，女子経済専門学校（東京文化短期大学の前身），杵家女塾等である。その中で最も関係の深いのは東京女子大学であって，彼自ら初代の学長であった。また，新渡戸の影響を大きく受けて育てられ，あるいは，ささえられた子教育の指導者をあげるならば，恵泉女学園長であった河井道子，東京女子大学の二代目の学長であった安井てつ，津田塾の津田梅子らが最も代表的な人たちであろう。

a.　女子高等教育への貢献

——東京女子大学・津田塾・女子経済専門学校——

近代日本において女子教育は文明開化の欧化主義の刺戟，殊に，ミッショナリーたちの努力によって早くより割合盛んとなったが，それらは中等女学校であって，女子の高等教育，専門教育がおこって来るのはややおくれる。先づ教師養成の必要に迫られて師範学校教育からはじまっており，明治23年3月には高等師範学校女子部を分離して，女子高等師範学校となった。しかし，民間から女子の高等教育を起そうとする気運が興って来たのは，明治30年頃からである。先づ，日本女子大学の創立者成瀬仁蔵が第十回議会閉会直後，即ち，明治30年（1897）3月25日に貴衆両院議員，新聞記者，名士多数を帝国ホテルに招いて第一回創立被露会を開き，初めて女子大学設立の計画を一般に公表し，賛否相半ばする世論の反響の中で発起人会をつくり，華やかな設立準備運動をおこした。成瀬は明治23年（1890）から明治26年（1893）にかけてアメリカで女子教育について研究し，

女子教育を自らの天職と考えるに至った。日本では女子に高等教育を授けているのは女子高等師範学校のみであるのに，アメリカでは大学と称するのものが357校で，そのうち，女子に入学を許すものは実に337校もあるという事実も成瀬に女子高等教育の必要を痛感させる一つであったようである。その目的で資料を集めて，明治27年帰朝した。彼の主張した女子教育の理念は，1)．女子を人間として教育すること，　2)．日本婦人として教育すること，3)．日本国民として教育することをその方針として帝国教育会で演説したことによっても明らかに示されているように，西洋の同権説に基いた女子教育論と日本的女子教育論との融会をはかろうとするものであった。成瀬は，決して男子と並んだ高度の教育を目ざしていたのではなく，女子を良妻賢母として教育することを主眼とするが，必要が生じた際，一国民として自立することを女子高等教育の任務と考えていた。そして，日本女子大学が開校されたのは，明治34年（1901）である。

他方，明治4年（1871）の五人の女子留学生中最年少者であった津田梅子は，成瀬と殆ど時を同じくして日本人の手で英語を充分に教えると共に西欧のものの考え方を学ばせる女子の高等教育の必要を痛感していたのであり，津田英学塾を明治33年（1900）に創立している。

また，女子に職業教育が必要だといった考え方は明治30年代にも現われて来ており，吉村寅太郎『日本現時教育』（明治31年），松原岩五郎『女学生の栞』（明治36年）などにも書かれているが，それはあくまでも万一の場合のために秘めおくべきものとして取り上げられているのであって，ここでも良妻賢母主義が支配的な女子教育の原則と考えられている。成瀬の日本女子大学も一般からは特別視されていたのであり，明治43年に東北大学の総長沢柳政太郎が黒田チカ外二名の女子に本科入学を許したなどということがあっても，これは全く異例のことであって，良妻賢母主義が一般の大勢であり，女子の高等教育はまだまだ認められるにいたっていなかった。

新渡戸はさきにも触れたように，いわゆる良妻賢母主義には批判的であ

り，女子を特に女子と考えずに，人間と考えるべきだと云っており，男子と何ら差別することなしに，女子教育の必要を熱心に考えていた。従って新渡戸は特に女子の高等教育のみを重要視していたわけではないが，高等教育にも大きな使命感を抱いていたことは，津田梅子の親友として，創設期の津田塾を助け，1904年，社団法人 女子英学塾 設立に際しては巖本善治，元田作之進らと共に社員として名をつらねており，社団設立より解散にいたるまで終始社員であったのは新渡戸一人であり，塾の「伯父」をもって自任していたことによっても明らかにうかがえる。津田梅子は津田塾の教育に関して新渡戸のもとへ相談に行っていたと云われる。(6)

しかし，彼が最も深い関係をもったのは，東京女子大学であった。

明治43年（1910），イギリスのエディンバラにおいて開かれた万国宣教師大会に端を発し，日本にキリスト教主義の女子大学を設置しようとする準備は多くの人たちによってつみかさねられて来たようであるが，東京女子大学が設立されたのは大正7年であり，新渡戸稲造はその初代学長であった。

「本校の創立以前，数年に遡って日本に於て高等なる女子教育の機関を設立せんと，日米人の間を屢々奔走した事ども思いまわせば，今尚明らかに記憶に上る。且，我々の目的が達して米国の有志より多額の醵金があって，いよいよ開校の運びに至った悦びの如き，或は少数の学生を相手に授業を開始した当時を偲んだりすると，既に十五年を経るとは思われぬ程記憶が新になる。」と東京女子大学の『創立十五年回想録』の「巻頭の辞」に新渡戸自ら書いているところからも，その創立のためにいかに彼が尽力したかは明らかにうかがえる。

それでは東京女子大学という女子に高等教育をさづけるこの学校の教育に新渡戸はどのような理想をいだいていたのであろうか？　東京女子大学関係には記録が残っていないようであるが，河井道子が日本 YWCA の総幹事当時，編集していた『女子青年界』（日本 YWCA の機関誌）に「東京女子大学に就て」（大正7年4月号），「基礎的の学問」（東京女子大

学開校式における演説概略—大正7年6月号）などが書きとどめられているので，そこから彼の考えをうかがってみよう。

彼は先づ，第一に「女子が盛に教育を受けると其国が亡ぶ」というような考え方は，男子の意久地のない，卑怯な議論だと云い，また，良妻賢母主義を日本独特の女子教育の目的だと誇って来た考え方をもしりぞける。彼は男子におとらず，女子の中に潜伏している偉大な力を発揮させることの必要を切実に感じているのである。

第二に，日本の男子の教育が，機械を作るとか，道具を作るとか，役に立つものを作ることを目的としており，学生もその人生観は，免も角も学校を出て免状さえとれば，幾ら幾らになるという考え方で，パンを得る道の学問をしている者が多いが，女子も妻業，母業という職業を習うといった種類の職業教育ではいけない。基礎的，根抵的な学問，現象の底にある原理を知る学問をしなければならないと云っている。

第三に，東京女子大学は名に現われていないが，キリスト教主義で立つ大学である。そこで信仰と学問との関係が問題になる。宗教は高等なる知識，科学，学問と矛盾するものであり，学術の研究にとって宗教はかえって害があるように考える者がある。しかし，それは，高等知識，科学，あるいは，学問とは何であるかということ，および，キリスト教とは何であるかが正しく理解されていないからそういう誤った考えが起るのであって，真に信仰を持つ者は，「角は角，円は円，柳は緑に花は紅と物其物を其儘に見る」態度を得る。物其物をそのままに見，その理を見きわめさせるのは，心の内外の事物に対する敬虔な態度であり，この態度がなければ真に高等な知識は得難いと新渡戸は云う。真実な信仰を特つ者こそ，真に冷厳に物そのものにまむかい，その理を謙虚に究めることが出来るのであり，その意味において，真に，科学的でありうるというのである。

しかし，キリスト教に基いたこの学園で求めるべき知識は単なるknowledge ではなくて，wisdom である。学問の底にそれをささえる信仰，宗教によってつちかわれる人格が養われなくてはならない。真に学問す

る者はそういう意味で最高の識に達してもらいたいと云う。「今回開らく女子大学の希望する所も最高識を得るにある。物知りを作るより真面目なる人格を築くを以て大任とする。賢き人より確な人を出すを以て誇とする。良妻賢母より崇高なる人物の教養を以て目的とする。一度人格の根底を養うを得ば知識や技芸は自ら高まることを信ずる。」と云い，君子は器ならず。従来我邦の教は婦人を一種の器と見做して来たが，女子の高等なるキリスト教々育は率先して，女子の人格を認め，その完成のために，努めなくてはならない。そういう思想を助長することに努めなくてはならないと説いている。

ここには女子に高等教育をほどこすことの必要，学問観，信仰と学問の関係，および，「高度の識」(wisdom) と彼のよぶ信仰にささえられた真理の体得，学問する主体としての人格の形成などに関する新渡戸の見解が明らかに見られる。

尚，新渡戸の説得で東京女子大学の学監となり，二代目の学長ともなった安井てつ，および，当時の女子大の学生たちの追憶記の中から教育者としての新渡戸の特質のうかがえる文章を幾つかひろいあげてみよう。

女子高等師範学校で9年間学び，文部省の留学生としてイギリスに留学していた安井てつは，女子教育のために献身して国家に奉仕したいという堅い決心を持っていたのであり，キリスト教と愛国の精神とは相容れないと信じていた。しかし，ヨーロッパにおいて力をもつキリスト教を目のあたりにする時，生活と宗教，教育と宗教の関係について深く考えさせられ，特に日本人としてこの問題の解決に人知れず悩んでいた。そういう状態にあった安井がはからずもパリで新渡戸博士に逢ったので，その問題についての意見をきいた。「此時先生は，北海道帝国大学の前身である札幌農学校の教頭時代の教育上の体験を語られたが，私は非常に啓発せらるるところがあった。殊に，『私は教室に臨む前黙禱した』という言葉が，私の若い心を強く刺戟したのである。而して神聖なる教育事業こそ実に祈を以て当るべきであるとしみじみ感じたのであった。」と書いている。(7)

更に，東京女子大学の学長時代の新渡戸については次のように書いている。「偶大正7年東京女子大学の創立に際し，当時東京帝国大学の教授たりし先生は推されて学長となられ，私は学監として先生の御指導を仰ぐこととなったのも不思議である。学長としての先生は，時々来校されたが，事務上の話は余りお好きでなく，いつも教室に臨まれて授業を参観されるのを楽しみとして居られた。そして生徒に代って教授に質問されたり，或は又教授に代って答えられたり，学問を研究する正しい態度を示された。独り教室のみならず時としては寄宿舎に来られて，生徒と共に会食されることを非常に喜ばれた。かくして先生は恰も吾が娘に対するが如き態度で生徒を指導され，生徒も亦慈父の如くに先生を敬慕したのである。」(8)

さらに，『新渡戸稲造先生追悼録』に収録された当時の生徒たちの追憶には次のような人間像と教育思想が描き出されている。

「日本には最初の試みなる『個性教育』を標榜した女子大学が新しく設立された。『個性教育』の四字に引きつけられた一田舎娘は頑固な漢学者なる父を説き伏せ，故郷を後にはるばる上京し，小日向台に桜花散り散る4月1日，日頃敬慕する新渡戸博士を父と共にお訪ねした。……私は東京女子大学に入学の希望で上京したが，在京の兄達の反対に逢って途方にくれて博士の御意見を仰ぎに来た旨を恐る恐る述べた。博士は腕を組んで黙ってきいて居られたが，徐ろに口を開かれて，『なるほど』とうなづかれ『結婚しても，相手に依っては学問する事も出来るなどと考えるのは兄さん達の考えが足りない。今日の若い男子は昔と違って，妻君を女中扱いする様な事はなくなった様だが，まだまだ封建時代の遺風が強くて，男子はとかく我がままだからね。たとえ，そういう約束で結婚しても，結婚すれば，子供が出来る。子供が出来ても，約束だからとて，学校へ行ったり，本をよんだりばかりしていられなくなる。……たとえ，また学問が中止になっても家庭的に幸福がつづけば世話はないが，誰がその保証が出来ようか。不幸は何時でも起らないと限らない。其処だ。たとえば子供を残して，夫に先き立たれたとか，舅姑との折り合いが悪くて，離婚になったと

かいう場合に，もし，自分に，経済的独立の自信があれば問題はないが，もしそうでない場合，女学校を出ただけぢゃ，どうする事も出来まい。何か専門的の知識を養成して置かなければこういう場合にまことに心細い話である。現に，私は，ある婦人雑誌の顧問をしている関係上，毎日何十通となく身の上相談の手紙が来る。その大部分は結婚前に何の用意もなく，ボンヤリ結婚して終って後悔しているというのである。だから，私は，結婚前に出来るだけ学問をして置き度いというあなたの意見に賛成する。兄さん達が面倒を見てくれないなら，私の家へ来て，私の仕事の手伝いをし乍ら，学校へ行ってはどうか。』と。」(梅沢時子)。そしてこの人は新渡戸のセクレタリーとして新渡戸家に起臥し，女子大学に通うことを得たのであった。(9)

ここには，東京女子大学が日本に最初の試みとして「個性教育」を教育目的にかかげたことが，地方の女学生に人間としての新しい在り方への夢を与えてひきつけたこと，および，新渡戸が，それと共に，女子の社会的独立をもこうした高等教育によって獲得させようと希っていたことがうかがえる。

「いつも忘れる事の出来ない新渡戸先生と安井先生の面影，折に触れては適切にお論し下さった慈愛深いお言葉の数々，色々可愛がって頂いた角筈時代の懐しい思い出は，官立の学校を了えて入学した自分にとっては，一つ一つ驚異と喜びで御座いました。以後十幾年を経た今日まで不思議な魅力を以て生活の原動力となって居ります。心の奥で求めてやまない純潔と正義と愛の精神に，先生方の深い御人格を通して親しく触れ，仰ぎ見る事の出来た自分の運命をいつも神に深謝して居ります。新渡戸先生が，良い教師は自分に触れる学生の人生観を全く新しいものに変え，その将来の生活を全く変えさせる程の感化を持つと申されましたが，全くその通りで御座いました。……

教育に就て話されたお言葉の中で，『自分は学生の頃，人格に個性的差異があるんだと知るまでどれほど悩んだか知れない。今日でこそ誰もこの

意をみとめ，個性と云う言葉がよく用いられる様になったが，何十年の昔はなかなか思い及ばなかった事であった。お互いに，此の人格的差異があるんだと云う事を充分に認めあって，それを生かして行く事が，お互いを幸福にする教育として大切な事である』，『善悪と自分の好悪とをはっきり区別する事，そして何事にも美をみとめて，出来るだけ，好きなものが多くなる様につとめる事』，『自分の責任を深く自覚する程度に依て，その人の教育の深さをはかる事が出来ると思う』『品性が人格をつくりあげる。善良な力強い品性』，右の様なお言葉が，断片的ではありますが，よく思い出されます。」(中上川俊子)。(10)

日本に未だ存在しなかったキリスト教に基いた女子教育のための大学の image 即ち，信仰に基いた個性教育，品性，人格の尊ばれる人間形成，福音の真理にささえられた wisdom の尊重，信仰にささえられ，真理の前における謙虚さの故の自由な，科学的，学問的真理の究明，女子の独立をささえる専門知識の習得等の諸目的が新渡戸の人柄と教育活動を通して破綻なく綜合され，東京女子大学の出発に際して基本的な方向づけと性格づけとを与えたのではなかろうか？　また，安井てつをして近代日本に有数のすぐれた女子教育者たらしめたのは，勿論彼女自身の素質にもよるであろうが，新渡戸によってその教育者としての最も大切な生命の萌芽に点火され，更に育成されて行ったのではなかろうか。

なお新渡戸は女子経済専門学校（之は，昭和2年にお茶の水に設立された女子文化高等学院の名称を変えた学校，現在の東京文化短期大学の前身）の校長でもあった。勿論，東京女子大学の場合のように，自らその設立に心労し，その教育方針に責任をとるといった関係の仕方ではないが，森本厚吉がジュネーヴから帰った新渡戸を訪ね自分の社会事業について説明した後校長にとはたのみ得なかったが，せめては名誉校長にでもなっていただき度いとその援助をおそるおそる願ったところ「どうせ君の事業を助けた

いと思っているのだから，校長の方が都合がよければやってみてもよい。そうした女子専門教育の必要は十分に感じているから」と云って，快く校長をひき受けたということである。(昭和3年)。日本の婦人に必要な経済知識を普及させて我が国民経済の発展をはかるに必要な女子経済専門学校は非常に意義の深いものだといって援助を惜しまれなかったとも森本は深い感謝をもって書いている。具体的には一週に一回くらい学校に来て新渡戸特有の愛の教育，人格教育の話をしたようである。(11)

b. 河井道子における女子教育者，婦人運動指導者の育成

札幌のミッション・スクール北星学園（女学校）の2年生の頃から，札幌農学校の教授であった新渡戸より薫陶を受けた河井道子と新渡戸との人間関係は，新渡戸が当時の日本の学生をどのように導いたかを示す一つの資料だと云ってよいであろう。北星学園以来，新渡戸は河井道子とっての生涯の恩師となった。

当時北星学園は宣教師 Miss Sarah C. Smith によってはじめられたばかりであって，札幌農学校の教授たちが幾人も講義に来ていたのであって，新渡戸もその一人であった。しかし，その中で学生たちに最も大きな影響を与えたのは新渡戸先生だったと河井道子は“My Lantern”(1939)の中で述べている。また，「北星」(Northern Star）という校名は，新渡戸博士がつけたということが北星女学園に云い伝えられているとのことである。(時任園長談)。その教え方はドラマティックであり，特有のユーモアで女子学生たちを楽しく学ばせたようである。家庭にもよく招かれて行ったという。新渡戸の死をいたむ「恩師新渡戸博士」という文章の中で当時の女学生時代を河井道子は次のように書いている。「15, 6才頃にウオズオースやゴールドスミスの名吟やエリオット，デカンスの物語を札幌の小さな校舎の一隅で数人の娘たちと共に先生から教えて貰ったのである。のみならず，西洋歴史の手ほどきや日本の古歌をもその頃先生に紹介された

のである。『ただ見れば何の苦もなき水鳥の胸にひまなき我思かな』『見る人の心々にまかせおきて高根にすめる秋の夜の月』『人多き人の中にも人ぞなき人になれ人人となせ人』などは先生が其頃愛吟されたものであった。『道のため倒るとならば姫小松千代の齢はねがわざらまし』の歌にて下田歌子女史の存在を田舎娘の我々に教えられそのも此師であった。』(12)

向学心の強かった河井道子に新渡戸はアメリカに留学することをしきりにすすめていたようであるが，河井は東京に出て明治女学校に学びたい希望を持っていたので折から札幌に来た巖本善治に新渡戸の家で紹介された。その時巖本は，新渡戸先生のような方のそばで個人的に指導していただくことが出来るなら，その方が将来のためにどんなによい結果をもたらすかしれない。わざわば東京に出て来ることはないと云ったという。それで河井は上京の希望は捨てて，札幌で勉強にいそしもうと決心した。しかし，その後，新渡戸は健康をそこねて，札幌農学校を辞し，沼津で静養することとなった。新渡戸の去ったあとの札幌の寂しさを道子は次のように書いている。

"Their going made Sapporo seem a desolate place to many of us. As for me, it made me more restless than ever to get away for advanced study."(13)

彼女は，新渡戸の世話で東京に出て，津田梅子のもとに（津田塾をはじめる以前）預けられ，学ぶこととなったが，更に新渡戸のすすめでアメリカに留学することとなり，1898年の夏，新渡戸夫妻に伴われて渡米した。2年間，準備の学校に学び，その後 Bryn Mawr College に入学する予定が新渡戸夫妻の配慮によって立てられていた。Vancouver についた時の新渡戸と河井道子との対話は興味深い。一人一人が提灯(ちょうちん)をさげて歩く暗い日本の道路と，街灯の明るい美しいヴァンクーヴァーの町とを対照しながら，人々が自分だけのことを考えて生活する社会と，人々が協力する社会とのちがいを新渡戸は次のように語っている。（河井道子の英語の自伝 "My Lantern" より英文のままで引用することとする。）

"Haven't you yourself experienced fall into a ditch, even when you carried a lantern? Well, while you are here in this country, remember that whether you are in college, in a store, or simply among friends, people unite in doing things, and this is called co-operation. At home we still carry our individual lanterns, which is more expensive and less safe; we do things in lantern style, for we have not yet learned to work and play together. We have not brought you America merely to develop your intellect; if that were your only aim, you could find in Japan more to study than you could absorb in your lifetime. Here your real education willb e outside of books and college walls. And another thing—you will come in contact with many great personalities."(14)

河井が日本にだって偉大な人はいるではないかと反論すると，新渡戸は日本の偉い人たちは高いところにいる人たちだ。しかし，アメリカでは偉大な人物は台所や学校や人生の普通の歩みをしている人びとの中にいる。キリスト教の偉大な働きの一つは，社会的階級の如何にかかわらず，人間の人格（personality）を育成することだと語りきかせている。河井道子はこの時の対話を通して得た教訓は生涯忘れられないものであったと書いている。

ここで新渡戸が意図しているのは，アメリカという国の称讃にあるのではなくて，こうして新しい国に来た一人の女学生に，人間の価値についての考え方，台所や平凡な人々の生活の中に偉大な人間がいるという人間のえらさ，偉大さということの本質を示し，また，一人一人が自分自身のためにだけ提灯をもって歩くということによって象徴される人間関係と街燈によって町全体が明るくなるということによって象徴される協力的人間関係を教えているのである。こうした目前の具体的な状況や問題についてpersonalな対話を持ちながら，本質的な問題について考えさせるというところに新渡戸のtypicalな教育方法があったのではなかろうか。

そしてまた，ここには，YWCA（日本基督教女子青年会）のようなキリスト教の精神に基いた人間の人格形成と，新しい人間関係，社会関係をつくり出してゆこうとする婦人運動を日本に始め，それを推進してゆくために後年河井道子が情熱をこめて働くこととなった問題意識への最初の点火が見出せるのではないかと思えるのである。

明治37年（1904）帰国した河井道子は津田塾で教えることとなったが，間もなく日本にYWCAを創設するために来日したミス・マクドナルドをたすけてその創立の基礎づくりに重要な働きをした。そして，日本YWCA（基督教女子青年会）は明治38年（1905）に早稲田大学の大隈講堂で開会を宣した。volunteer としてYWCAに大きな貢献をしていた河井は明治45年（1912）には日本人としての初代総幹事になっている。（日本YWCAの初代総幹事はミス・マクドナルド）。河井は日本の女子学生たちや婦人たちをしてYWCAの理想に目覚めさせ，キリスト者に基いた新しい人間形成，および，新しい人間関係の形成を目ざす婦人運動を生々ともり上らせる推進力となった。

婦人の自発性を尊び，婦人が自ら責任をとって共に協力し，一つの目的に向かって進んで行く運動は，日本には育ちがたいといわれて来た。それは自分の意見を持たず，人に盲従することを美徳として代々教えこまれて来た日本婦人の，やむなく体得して来た在り方だったといえよう。多くの婦人団体は男子の指導下に統制される形をとった。平塚らいてうらの青鞜社とか，山田わか，平塚らいてう，市川房枝らの新婦人協会など，新しい婦人の運動も起った。しかし，一般の家庭婦人はあまりかえりみなかった。婦人の覚醒と成長のために始められた婦人運動も，一般婦人の冷い傍観的態度が男子の封建的特権意識を助長させ，その成長をはばむ力となったとさえいわれた。こうした土壌にあって，婦人の主体の確立と社会形成を課題としたキリスト教の婦人運動を開始し，その参加した婦人の層に制約があったとは云え，（中産階級のインテリ女性が多かった。ことに津田塾，東京女子大学の学生たち，卒業生たちは活発に参加した。）また，明治末期

より大正時代にかけておこって来たデモクラシー運動，ヒューマニズムや国際協調主義などの思潮の波に乗った面もあったかもしれないとは云え，婦人たちの自発性と責任感の育成によって活発な運動たらしめたことは注目に値する。更に，この運動を国内の運動にとどめず，世界の婦人運動に連けいさせ，世界各国の仲間たちと共に新しい人間の形成と社会の形成，更に，新しい世界の創造のために働こうとする vision に婦人たちをふるい立たせた。そういう意味で，河井道子は狭い意味における教育のわくを破った女子教育者（社会教育家とも云えよう。）であった。それは新渡戸の在り方に通ずるものでもあった。

新渡戸は明治末年頃から大正8年頃まで，YWCAの集りに度々招かれて来て講演をしているが，そこには，次のような幾つかの強調点がみられる。第一に，人格の養成，人の人たる所以，および，その自由と責任の強調。ここでも彼は，今日の我国の教育は女を人として教育していない，人ということを教えていない。妻とか母とかになるのだと云って，男子の附属品となるよう教えているが，これは誤りだと云い，「女」ではなくて「人」なのだ，人間には人間として，他者と異った，他者の真似の出来ない所があり，他者と異った使命のあることを強調している。第二に，自己のためではなくて，他人のために働くことの大切さを説く。彼はキリストの「汝の欲する所を人に施せ」の言葉と孔子の「汝の欲せざる所を人に施す勿れ」を対照し，孔子の消極性に対するイエスの教の人格的自由の積極的意味を，vision にもえた青年の在り方の問題として説いている。富，位階，学問などは非本質的な附属品であり，人も我も共に人間として相交ることが大切だと云うと共に，より多く困難を背負っている衆民の救いのために働くことこそ，デモクラシーに力をかすことだとも云っている。(15)

こうした，キリスト教の信仰に基いた個性的人格の尊重と，他者と人格的対話をもちあい，他者に対して，心からの自由と責任感とをもって奉仕しようとする積極的な生き方こそ，彼がキリスト教女子青年会の会員たちに求めるところだったのである。

河井は大正14年（1925），YWCAを辞したあと，恵泉女学園を創立し，[16] その園長として人格教育と国際教育に重点をおいた学園を形成し，女子教育に生涯を閉じるまで献身したのであるが，こうした歩みを通して彼女にとっての常にささえと導きとを与えてくれる教師は新渡戸博士であった。河井道子のような近代日本にとっての独自な，そして，偉大な婦人教育者を育てたのは実に新渡戸博士であったと云っていいであろう。

新渡戸の死をいたむ文章の中で彼女は恩師のことを次のように書いている。「…国際的にも，国家的にも，個人的にも，上下押並べての者に心より敬慕せられた博士の如きは実に稀である。其と云うも先生は愛の人であったからである。先生は人間を愛した。同胞を愛した。貧乏人を愛した。弱者を愛した。特に子供を愛した。人類の福祉を願うた先生が平和主義者であったのは当然である。過去二ケ年の先生の心労が死を早めた原因であるが，最も日本を愛し，世界を愛したがための尊き犠牲である。愛するものは又苦しむものであるから，先生の世を思う苦痛は普通人の想像だに及ぶ愛ではない。先生は『愛国者は憂国者である』と常に云われたのは，御自身の心境を語られたのである。」[17] 河井道子は，教育の最も重要な課題は人格の形成（development of personality）と人物を新につくりかえること（re-creation of character）にあると確信していた。"The fundamental test of education is the evolution of personality and the transformation of basic character into likeness of our Lord."[18] こうした教育理念は新渡戸のそれを受けつぐものであり，河井はそれをもって彼女のふれるあらゆる少女たちのふところに新しい人間形成をよびおこす教育者であった。

その他，新渡戸の関係した学校としては，フレンド女学校がある。さきにもふれたが，彼がアメリカの Johns Hopkins University で学んでいた頃の「日記」によると，彼は早くより，日本の婦人ほどみじめな者はいない。日本の婦人の地位を高めるために努力しなければならぬと繰返し記

しており，また，彼が日本に是非女子の学校をつくり度いと Mrs. Scull（日本人留学生に親切だった夫人で，この人の家での勉強会で Miss Elkinton ― 後の万里子夫人とも知りあうこととなった）に語ったようであるが，Mrs. Scull らは，新渡戸の余りの熱心さに動かされて，フレンドの人たちの間で日本に女学校をつくろうということが真面目に取り上げられるようになった。それが日本にフレンド女学校創設の start となったとのことである。（新渡戸琴子氏談による。）

フレンドの第一年報（1884年），第三年報（1886）年もこうした経過を報じており，ことに，第三年報に「昨年中は数回特別集会が開かれた。その第一回は6月20日で，日本の二青年太田稲造（新渡戸），ジョナサン・K・内村（鑑三）が出席し，日本に於ける働きの必要に就き，多くの有益な話があった。」とあることが『基督友会五十年史』[19]に記されている。明治20年（1887年）に創立されたフレンド女学校（渡部忠蔵校長）は，明治末年に25年を経てまだ全校生徒数は65人で小さな女学校であった。新渡戸がフレンド女学校と直接に関係を持つようになったのは，二代校長平川正寿氏が大正元年校長就任後，同校発展のため新渡戸に顧問になってくれるよう依頼されてよりのことである。しかし，彼は，時々学校に訪ねて来て学生たちに話をしたり，卒業生を新渡戸宅での暁さん会に招く程度で，同校の教育方針に意見を云うというようなことは殆どなかったとのことである。（平川正寿氏談）。そういう意味でフレンド女学校における教育内容との直接的かかわり合いはあまりなかったと云うことになるであろう。

なお，三味線を音譜にした杵家弥七夫妻を特に目をかけて援助し，杵家女塾に農園をおくるなど，関係が深かったが，女子教育への貢献として特に取上げるほどのことはないと思えるので，ここでは，その事実を指摘するにとどめる。

以上を通じてみる時，新渡戸は女子教育ことに，女子の高等教育に非常に大きな関心をよせ，その指導にも積極的に当ったのであるが，その教育

理念は本質的には男子の教育の場合と変らない。

当時，日本において，一般的に女子教育の目的がどのように考えられていたかを考えてみると，それはさきにもふれたように，良妻賢母主義であった。それは明治20年中国地方の学事巡視に際して森有礼文相が女子教育に関する説示の中に見られる「国家を思うの精神に厚い良妻賢母の養育をなし，もって国家の富強に資せん」といった考え方につながるものである。(20) 更に，明治末年より大正時代にかけて日本の教育界において指導的な立場にあった深柳政太郎もその著書『実際的教育学』，および，『我が国の教育』において，女子の中等教育，あるいは，高等女学校の教育目的は，良妻賢母主義だと云っている。そして，女子を女子として教育するということは，女子を一個の人格を具えた人間として教育することだと云い，良妻賢母主義は女子を方便視して教育する主義のように考える者があるが，女子の働くべき天職が家庭内にあるのだから，良妻であり賢母であることこそ，女子の天性を発揮させ，天職に適う教育である。また，女子の教育目的を良妻賢母とするなら，男子のそれも良夫賢父としなければ不公平だと云う者があるが，男子の天職は社会にあるのだから，男子が良夫賢父でなくてはならないという義論は成り立たない——と明らかに新渡戸の主張を論駁している。(21) これを見ても，新渡戸の人格主義的人間形成，および，男子と同等に独立も出来，社会的活動も出来る学力の養成を目ざす女子教育の目的，乃至，理念が，当時の日本の正統的教育学の領域において，どういう取扱いを受けていたかは，明らかにうかがえるのである。

註 1. 福沢諭吉『続全集』第2巻， p. 433 以下

2. 巌本善治は，明治25年に出版した『吾党之女子教育』の中で，明治女学校では，西洋風，旧弊風のどちらか一方に僻せず，学科の配分も和漢洋の三を相応にするを旨とすると云い，「女子教育の科目は，今日の女子が消化し得べき総ての学科を教ゆるの中にも，特に美術上，職業上，道徳上の科目を多くすべし。而して之を学ばしむるに只だ初めより一家の妻たることのみ目的とせしめず，寧しる真の女，円満したる女性となることのみを志願

せしむべし，然るときは一家の良妻賢母たる者も出来得べく，亦万人億兆の為の良妻賢母たる者も出来得るなり。……女子は良妻賢母たらざる可らず。然れども亦た賢良なる人間と為らざる可らず。女子は良妻賢母と為ることを要す。而して賢妻良母の尤も賢良なるものは正当に高等教育を受けたる者也。」

3. 新渡戸琴子氏（新渡戸博士の養女）所蔵。この未発表の「日記」は新渡戸博士歿後，弟子たちより発表を求められたが，万里子未亡人はまだ発表の時期でないとし，琴子氏に時を経るまで見ないようにと箱に鍵をかけて渡された由。琴子夫人は現在それを読みはじめておられる。この「日記」が出版されると非常に意味があるのではないかと思う。

尚，新渡戸の不幸な婦人に対する同情は，彼が下田にお吉地蔵をたてたことにも見られるが，それに刻まれた日付が，彼の亡き母の命日であることを考える時，彼は亡き母を記念するという気持があったのではないかと矢内原忠雄氏は語っておられる。

4. 石井満『新渡戸稲造伝』 p. 447
5. 新渡戸稲造「女子独立論」石井満『新渡戸稲造伝』 pp. 464—468。
6. 『津田塾六十年史』(1960年刊) p.95, p. 234，その他。
7. 安井てつ「新渡戸先生の追憶」.『新渡戸博士追憶集』p. 381。
8. 同 pp. 381—2。
9. 東京大学同窓会，同学友会編『新渡戸稲造先生追悼録』 pp. 142—144。
10. 同 上 pp. 127—133。
11. 東京文化短期大学森本厚吉伝刊行会編『森本厚吉』(昭和31年) p.116。
12. 河井道子「恩師新渡戸博士」『恵泉』第2巻 (1933) 10月号。
13. 河井道子 "My Lantern" p.60。
14. 同 上 p. 65。
15. 日本 YWCA (日本基督教女子青年会) の機関誌『女子青年界』には新渡戸稲造の文章が多く掲載されているが，それらは多く YWCA の集りにおける彼の講演の記録である。新渡戸稲造「女子青年会の使命」(『女子青年界』大正6年7月).「自由の理」(同 大正6年9月),「デモクラシーの真義」(同 大正8年1月) 等。

16. 河井道子は恵泉女学園の創立を思い立った時，渡米の途次，新渡戸に相談するため，ジュネーブで出かけた。その時，50才近くなってからの冒険に賛成しなかった新渡戸も，彼女がいよく恵泉女学園をはじめるとなると，いろいろ助けたようである。
17. 河井道子「恩師新渡戸博士」『恵泉』第2巻10月号。
18. 河井道子 "My Lantern" p. 228。
19. 『基督友会五十年史』平川正寿編（昭和12年），p. 12。
20. 『学制八十年史』 p. 115。
21. 沢柳政太郎『実際的教育学』（明治42年）沢柳全集（大正14年）第1巻 pp. 58—63。同『我が国の教育』（明治41年）同全集 第1巻 pp. 514—536。

C．労働青年の夜学校教育

—日本におけるセツルメントの先駆—

日本において労働者の教育施設が出来はじめるのは大正9年から10年にかけてのことであり，それは，第一次世界大戦後の恐慌を境にして労働者自身が自分たちを教育する施設をつくり出したことによっている。その主なものをあげれば，東京労働講習所（友愛会東京連合会主催—大正10年設立）。関西労働講座（関西労働組合連合会主催—大正10年3月設立），神戸講座（関西労働組合神戸連合会主催—大正10年4月設立），日本労働学校（労働者教育協会主催—大正9年9月設立），月島労働講習会（月島労働相談会主催—大正10年12月設立），大阪労働学校（大阪市安治川教会内に開設，賀川豊彦校長となる—大正11年6月），等である。

また，こうした労働者自らによる労働者教育と対抗して，同じ頃から工場主の側による労働者教育もだんだんとさかんになって行ったのであって，穏健忠実な労働者を育てるということ，および職業にとって必要な技術を習得させることを目的とする工場附属の工場学校，あるいは，工場の委託を受ける職工学校などが多くつくられるようになった。それが後の青年学校の前身であった。

しかし，これ以前の日本において働く青少年のための教育は殆どかえりみられないのが実状であった。

アメリカの Johns Hopkins University に学んでいた頃から，新渡戸は貧民の子供や労働者の子弟の教育機関をつくりたいという深い希いを持っていた。それは女子のための学校をつくり度いというねがいと同様，22歳頃からの切実なねがいだったようである。明治18年（1885）11月13日，ジョーンズ・ホプキンス大学から北大の同級生で親友の宮部金吾氏宛に出された手紙の中に次のような一節が見られる。（当時彼は手紙はすべて英文で書いている。）

"It is, indeed, my earnest desire and sincere prayer that I may one day be able to do something for my God and for my country in Sapporo. More than two years ago, while I was still teaching there, I thought strongly of founding a school for the benefit of the people. My idea of a Sapporo Academie is that it should accommodate three kinds of pupils; (1) old or full grown men, to whom lectures should be given in Japanese, on History, Economy, Agriculture and Natural Science; (2) boys and youths who wish to prepare themselves for Colleges or University and yet who cannot regularly attend the Yobiko; (3) night school for the rugged children for poor parents, laborers' boys etc.…… Never has this idea of education left my mind. Even in buying books here, I always have this object in view."(1)

彼は，明治20年（1887）8月7日ドイツのボン大学で勉学中も，こうした貧しい人々のために夜学校をつくり度いという夢を宮部博士に書き送っている。

"My favorite dreams for Sapporo are now the establishment of a Yagakko （夜学校）for the poor and for officials, a Press with reading room, and if necessary (?) Girls School."(2)

こうした夢が実を結んで，遠友夜学校が札幌に設立されたのは明治27年(1894) のことであった。新渡戸万里子夫人の父 Mr. Joseph Elkinton はフレンドの熱心な信者で，慈善心にとんだ人であったが，ある孤児を孤児院から引取って14，5歳の時から家族の一人として育てていた。その女性は生涯，嫁かず，エルキントン家に忠実に仕え，60幾歳かで死んだのであるが，その人の遺産の一部分＄2000が遺言で万里子夫人のところへ送られて来たのであった。その金を何のために用いるかについて夫妻で相談の結果，新渡戸の長い間の夢であった貧窮した家庭の子供たちや晩学者をあつめて夜学校をつくろうということになったのである。札幌独立教会附属日曜学校の敷地，および，学舎を買いとり，新渡戸が校長となり，新渡戸および，札幌農学校の学生たち有志が教師となって，夜学校がスタートしたのであった。論語の「友有り遠方より来る亦楽しからずや」の句より遠友夜学校と名付けられた。

新渡戸の教え子で，この夜学校に関係の深い北大名誉教授半沢洵博士は夜学校について次のように書いておられる。「設立当時は校舎と雖も渺たる一小屋に過ぎず，附近の小童を蒐めて一週二回希望する学科を教えたが間もなく毎夜となり，教師は主として博士の教える札幌農学校生徒有志が献身的に是に当り，普通学の外，看護法，礼式，裁縫，編物等の実用学科に重きを置き，更に国民として恥しからぬ趣味と常識と品性の淘治に力を注ぎ，毎日曜には修身講話をなすを常として居たが，博士自らも屢々この講壇に立って講話をせられ，自らその指導に当られた。遠友夜学校の教育精神は実に此の時に吹込まれ，打立てられたとも謂つべく，間もなく，上級生徒の修養会として設けられたリンコルン会なるものは，実に博士のリンカーンの人となりを愛したるにより生徒等是に感激し，夫が言動を習わんことを旨とし生れたもので，今尚お遠友夜学校精神の涵養に多大の貢献をなしつつある事実に依っても知られる。夜学校は単なる貧民児童の教育のみならず，当時札幌の貧民街に位置していたために，或は看護婦を巡回せしめ，或は消毒薬を配希する等，恰かも今日のセッツルメント事業の

如き働きをなした。」[3] 北海道における最初の社会事業の一つだったと云われる。

なお，この遠友夜学校に関して書かれたものとしては，北大教授高倉新一郎氏の「遠友夜学校」[4]，および，「札幌農学校教授新渡戸稲造」[5]があり，この夜学校関係資料はすべて北海道立図書館に保存されているが，昭和19年，国家総動員の名に於て閉校を命ぜられるまでその使命を果しつづけたのであった。

遠友夜学校は貧乏な家庭の子供たちで，程度ははじめは小学校の過程だったが，卒業生は義務教育を受けた者とは当局に認められなかったらしい。後に中学校課程をおいたがこれも卒業資格はつかなかったらしい。高倉教授の「遠友夜学校」によると，生徒は昼間は職工や店員，給仕，事務員などで，多くは自宅から通っていたが，中には親類や他人の家に住込みで，日中働らいた報酬に夜学校に通わせてもらっている者も多かったと云う。多くは片親のない者（ことに父親のないものが多かった），家族の多い者で，俸給も一人前貰っているのは殆んどなく，殊に下級生は見習，手伝，住込などで特別お金を貰っていないものが多く，文房具にも差支える者があった。半数は夜学で学ぶ以外一時間も勉強時間のない者だったということである。この夜学校の生徒はこういった階層と条件の労働青少年たちだったのである。

他方，この夜学校の教師は新渡戸のような農学校の教授と，他は大部分が農学校（後は北大）の学生たちで，献身的な奉仕であった。一月に十枚綴の電車切符一枚貰うだけ。それも学校の財政が苦しいというと辞退してしまい，全くの無報酬だったという。大学生としての勉強の時間も必要であるのに，学生たちは喜んで夜学校にゆき，授業だけでなくて，その他の教務や事務をも泊りこんでまでやった。もう社会人である生徒たちは，こうした先生たちの努力には心を動かされていたようで，「夜，呑んだくれたり，女や遊びと日を暮している学生が多いのに，私達の先生は同じ学生であり乍ら毎日私共のために貴い時間を割いて無料で奉仕して下さる。こ

れ以上迷惑をかけない様にせねばならない。」と上級生は下級生に語りきかせていたという。その心が事毎にあらわれ，大工の出来る子供は金鎚をもって教室の修繕をしたり，ボロ校舎でも，誰かが額をかけたり，花瓶には毎日誰かが花を持って来て生けているといった学校であった。「こうして教える者と教えられるものが融け合っていた。共に大きな負担であったが，その負担を負担と感じなかったのは単なる若さだけではなかった様である。」[(6)]と高倉教授は書いておられる。教師でも生徒でも，暗い夜道で出逢っても，夜学校に来る者はその歩き振りですぐわかるほどのひたむきさで教師も生徒も夜学校に集ったと記されている。

この学校の教育方針について新渡戸の書いた文章は見つからない。しかし，この学校をつくる少し前，即ち，彼がアメリカから帰国し，北海道大学教授になった明治24年，堀基氏ら北海道の有志の人たちが創設した私立中学，「北鳴学校」の校長になってほしいと懇望され，会計のこと以外の学校経営をひき受けた。それは，彼がアメリカから宮部金吾に書き送った手紙にある第二の希望，即ち，上級学校を志望しながら予校にゆけないような青少年のための学校をつくり度いという夢の実現にかかわっていたことによる。そして，この学校は明治28年までつづいたが，その教師の多くは，札幌農学校関係の人たちであった。新渡戸はこの北鳴中学のために「授業の精神」という一文を書いている。そこにあらわれた彼の教育方針は恐らく遠友夜学校のそれにも共通するのではないかと思う。

「授業の精神」の中で新渡戸は，学生たちが学資の乏しい中で労苦して勉学する苦労に対して暖く同情し，摂養して健康に留意し，規律ある清潔な生活をし，スポーツも大いにやるようすすめている。（新渡戸は北海道にウインター・スポーツとしてスケートをはじめて導入した人である。）また，学問（知識）と人物との関係については次のように云っている。「学生ハ動モスレバ書ヲ過信スルノ失アリ，是レ事ニ応ジ物ニ当リテ自裁ノ念ニ乏シク唯他人ノ言説ニ盲従スルノ陋習ニ陥ラシメ，仮令多少ノ知識ヲ収メ得ルモ活用ノ力ハ大ニ薄弱ナルベシ，抑モ学問ハ人物ヲ養成スルノ具タ

リ，苟モ人物高尚ナラバ学問ナシト雖トモ恥ツルニ足ラズ，故ニ生徒ヲシテ学級ノ上下，試験点数ノ多寡，及ビ，及落第ニ深ク重キヲ措カシメズ，且日常教室ニアルトキハ，力ノ及ブ限リ学理ヲ推究シ，教科書ニ拘泥セズシテ専ラ教師ニ質問スベキコトヲ勧メタリ。」(7)

彼は活発な精神の発達を尊び，きびしい規則を設けて制裁などにたのむことを排し，各自がその良心に訴えて自らに責任ある態度をとるよう説いている。遠友夜学校の教育方針も，こうした「授業の精神」と同様のものであったろうことは容易に推察できることである。

遠友夜学校が，労働青年の学校として，社会矛盾やその解決法などを教えたとは思わないし，また他方，労働に必要な技術を教えるものでもなかったであろう。そういう意味でいわゆる労働学校でも，工場学校でもなく，授業内容は普通の学校だったのであり，彼独自の人間教育，学問への姿勢ということを除くと，労働青年の教育という意味では素朴な，程度の低い，非体系的な学校であったというべきであろう。しかし，店員，職工，給仕，事務員などをして働く青年たちの教育の必要を真剣に考えただけでなく，彼らのための夜学校を明治27年に既に創設したという実践性は注目に値する。しかも，新渡戸に教育を受けた農学校（北大）の学生たちは，上から恵みをたれるという態度ではなく，時間と労力の消もうにあえぎつつも喜びにみちてこの夜学校で教え，大学生と労働青年とが仲間意識をもって共に真剣に学んだということである。（夜学校は共学であったが，その女生徒と教師であった北大の学生との間に幾組か幸せな家庭がつくられたということも学生と労働青年との仲間意識を象徴的に物語るものであろう。）。そして，この夜学校で教えた北大生たちは，学生時代を考える時，北大よりも夜学校の方をよりなつかしく思うのが常であり，学生時代にいろいろ学んだことのうち，最も貴重な何ものかをここで学び，かつ，体験させられていたことをしみじみと考えさせられると記している。こうした記録をよむ時，この遠友夜学校は，新渡戸が「貧窮家庭の子供のために学校をつくり度い」とねがったそのねがい以上の何ものかを，教師と生徒の両方に

与え，貧民教育ということの意味するもの以上の教育内容と教育的意義とをこの夜学校の教育は生み出していたのではないかと考えさせられるのである。ここには，労働学校の原型もあれば，セツルメントの原型も，大学生の社会教育の原型もあり，更に，階層，職業，知識，性，年齢を異にした人々が対等の立場で共に交り，かつ，学びあう理想的な共同体の一原型も見られる。しかし，日本におけるセツルメント運動の先駆としての特色が最も顕著なものであろう。（ちなみに，片山潜が東京の神田三崎町にグリーン博士の援助をえてセツルメント的なキングスレー館を開設し，幼稚園，小僧夜学校，市民夜学校をはじめたのは明治30年のことであり，新渡戸の遠友夜学校は明治27年に始められている。）ここには誰が指導者というのでもなく，この夜学校を存在せしめている精神（スピリット）につき動かされて教え，かつ，学び，このグループに関りをもつ者はすべて人間として新につくり変えられる経験を持ったのではなかろうか。そして，新渡戸はそうした精神をふれる人々にも，仕事にも与える人だったのではないかと考えさせられるのである。

註　1.　宮部家所蔵の『新渡戸博士より宮部博士に宛てたる書簡集』（1884—86）p.p. 19—20。『新渡戸博士文集』 p.p. 223—224 にも収録。

2.　同上『書簡集』 p. 30。『文集』 p. 231。

3.　半沢洵「新渡戸博士と札幌遠友夜学校」『新渡戸博士追憶集』p.p.74—75。

4.　『北海道社会福祉』第1巻　第2号　所載。

5.　北大季刊　第6号，第7号所載。
『新渡戸稲造 and 内村鑑三』（北大季刊刊行会）に収録。

6.　高倉新一郎「遠友夜学校」 p. 16。

7.　「北海道尋常中学校の権与北鳴学校の記事」 p. 4。

D　通俗雑誌による民衆教育

—積極的人生観の伝達—

大正デモクラシーの中心的指導者吉野作造は，彼が雑誌に書いた文章を集めた著書『問題と解決』第5（文化生活研究会刊，大正15年）の「はしがき」に次のようなことを書いている。

「私が大学の学生であった頃，時の一高校長であった新渡戸先生が多忙の為め健康を害されていると伝聞して，非常に心を痛めたことがある。その頃私は新渡戸先生と面識あった訳ではない。初めて東京に出て来た大学一年生の秋，青柳有美君の主催に依り，神田の帝国教育会の楼上に開かれた或る講演会で，「カアライルとゲーテ」の話を聴いてから馬鹿に惚れ込んでしまい，それから度々演説を聴いたり，又その著者を読んだりして益々崇敬の念を深うしたのであった。斯の人が健康を損われたと聞いて当時の私が堪らない程の悲みを抱いたことを読者も恐らく不思議とはされまい。そこで私は今は故人となった親友の小山東助君に相談を特ちかけた。小山君は曰う，それは新渡戸先生にもっと仕事を減らして貰うより外に良法はない。先生はいま毎月『実業日本』に修養談を書いて居られるが，あれを廃して貰ったらどうか。一高校長としての先生の職分の方が遙に重大だからと。このサゼッションに動かされて私は一日一高の校長室に先生を訪ねた。そうして熱心に『実業之日本』の寄稿を廃め，余った時間を以て十分静養につとめられんことを懇請した。その時先生と私との間にどんな会話の交換されたかを今私ははっきり覚えて居ない。只鮮かに記憶に残って居るのは，先生が懐から一通の手紙を出し，之は今朝丁度出がけに受取ったのだとて私に示されたことである。先生は更に附け加えて曰わるるには，自分は毎月引き続いて書く積りはなかったのだ。併し一二度書いて居るうちに色々の人から色々の手紙が来る。更に疑を質して来るもあれば大に迷を釈かれたと感謝して来るものもある。自分のつまらぬ経験の記録が斯くも多勢の人の修養に資するとは真に意外であった。免に角不用意で始めたこと乍ら，自分の仕事の社会に何等かの貢献をして居るを思うと，今更やめるわけにも行かない様な気がすると。先生の懇ろな説明を聞いて私は成る程と感心した。更に今朝受取ったという手紙を読んで，雑誌を通し

ての先生の社会的貢献の意外に大なるものあるに驚嘆したのであった。」

日本において，大学教授でありながら，新聞，雑誌に文章を書くことを通して民衆に思想的影響を与えた最初の人物とよく云われる吉野作造が，新渡戸がその雑誌に書く文章を通して，こうした民衆との思想的，教育的つながりを特ち，また，それに新渡戸自身が情熱をこめて使命感をいだいたことに深く感動し，思想家，教育者のそうした在り方の示唆を受けていることは興味深い。

ここにも明らかに見られるように，新渡戸は通俗雑誌『実業之日本』，『婦人画報』，『婦人世界』その他の雑誌，新聞に「ものの考え方」，「人生観」などに関するわかり易い文章を連続して書き（講演も各地で行った），また，読者との手紙の交換などを通して，全国の青年男女に非常に大きな影響を与えた。それらの文章は『修養』，『世渡りの道』，『自警録』，『一人の女』，『婦人に勧めて』等々の本にまとめられている。そこにもられた思想の分析は，紙面の制約からもここではくわしく取扱わず，「新渡戸の思想」の項でまとめて取上げたいと思う。ただ，ここで指摘しておきたいことは，第一に，彼がたとえば従来，日本でよく用いられて来た「修養」とか「克己」とかいう用語を用いて語っていても，それは従来の消極的，諦観的な要素を含んだそれではなくて，全く質の異った積極的，開拓的なものの考え方，人生態度を本質としているということである。第二に，しかも，それが，それら全国の青年男女のふところに内包されているものの考え方を正面から否定するようなアプローチではなく，彼らにファミリアな用語を用い，また，具体的な事例を用いることによってわかりやすく説明しながら，その本質を新しいものに変えてゆくというような，思想伝達の方法をもっていることである。このようにして，新渡戸は通俗雑誌によって全国の未組織の民衆の教育者としての非常に顕著な独自の働きをしたのであった。しかし，くわしくは別の項にゆずり，ここではその点のみを指摘することにとどめる

III あとがき

—新渡戸の教育思想の特色（覚書）—

未完のこの小論の終りに，新渡戸の教育思想の特色と思える諸点を「覚書」として附記したいと思う。

先づ，彼はいわゆる教育学者ではなく，教育学的に理論的体系が組織立って述べられていたわけではない。むしろ，彼の人間像とその全生涯にわたる言論と実践とを貫いてその教育理念をさぐり出さねばならないのであり，それは，思想全体を繰返し再検討しつつ問いかえし，組立て直してみなくてはならない課題だと思う。そういう意味で，このあとがきはあくまでも「覚書」である。

第一に，彼は教育における目的，乃至は，価値意識に新しい課題をもち込んだと云えると思う。それは，既成の価値意識に対して新しい価値をもって Challenge し，学生たちのふところに価値意識の変革をもたらす教育者であったと云えよう。それは，当時の教育理念との関連で云うならば，明治初期以来のハート，ペイン，ジョホノット，スペンサーなどの教育理論の導入によって唱えられた人間生得の諸能力の陶冶，乃至，調和的発展といった教育理念は共通して主知主義的な傾向が強かったのであり，またその底を流れる教育目的のとらえ方は功利主義的であった。更に，ペスタロッチの開発主義教育も，そのキリスト教を基礎とした人間理解が充分に把握されない時，天賦の素質能力の開発ということも，日本では主知主義的，あるいは，心理主義的理解において受け取られていたと云えよう。こういった教育理念は高等教育においてはドイツ風の学問観と案外容易に結びつくものであったとも云えるかもしれない。

他方，教育目的を道徳に見出そうとする立場，ことに教育勅語を忠君愛国的教育の理念として道徳的に説こうとする教育学者は，教育勅語渙発と相前後してドイツより導入されたヘルバルトの教育学説を摂取し，利用した。ヘルバルトの教育学説はキリスト教に基いた立場において教育の目的

は徳の概念にあるとして，五道念（五つの根源的道徳理念）によって説いた。しかし，この五道念が儒教の五倫に似ているところから，これを日本的に偽装して（「神」とあるところを「天皇」と書き変えるなど），換骨奪胎して教育勅語に理論的根拠を与えるものとされたのであった。（こうした内容の変質した湯原元一訳，解説の『倫氏教育学』は明治26年頃より，7，8年間全国師範学校の約8割に教科書として採用された。なお，拙著『人間観の相剋』p. 245 以下参照）。そして，こうした教育勅語的教育目的（理念）と知的，功利的開発教育には，後者が前者に従属するものとして容易に結合しえたのであった。そこに新渡戸が直面する既成の価値意識があったと云えるのではなかろうか？

新渡戸はそうした価値の構造を解体して，キリスト教にもとずいた人格主義を基礎とした構造に組み立て直したのではなかろうか。人間をこえたもの（神）との vertical な関係を基礎にして，他者と horizontal な，社会的関係に立ち，人格としての自己実現と sociality（社会性）あるいは，to be プラス to do としての実践的教養主義を基礎として，学問，（知性），職業，社会，国家との間の新しい価値の構造が組み立て直されたのであった。こうした存在の意味，人生の目的即ち，to be を追求することが結果的には現実に対して妥協的となった観念論的教養主義と明らかに異質であらしめたものは，to do を必然的課題とするところの彼のピューリタン的実践的信仰（思想）にあったと云えるであろう。

第二に，彼はこうした教育目的，乃至，教育理念を，特定の教育段階，あるいは，社会階層の教育に限定して考えていたのではない。彼は高等教育，女子教育，労働者教育を貫いて共通して上記の教育目的をもって教育にあたったのであった。また，その教育対象は階層によって断絶されることなく，全国民的ひろがりを持っていた。彼の教育活動はある時期には男子の高等教育，他の時期には女子教育をと云った仕方ではなく，例えば，札幌農学校，北星女学園，遠友夜学校等の教育活動が同時期に行われていることなども，常に全階層に関心が向けられていたことを示すものであろ

う。(勿論それは，浅く，広くのそしりをまぬがれなかったのであり，彼の関係した学校のうちのあるものは，「かつがれただけ」という程度のものもあったことはいなめない。

また，彼は弟子を厳選した内村鑑三と対照的に，来るを拒まずの抱擁的態度で，どのような学生をも快く受け入れたところから，彼の影響を受けたと云われる人々の特色は実に多様である。従って，夫々の弟子の特色から新渡戸の本質を見出そうとすることは危険である。しかし，その多様なものを多様なるままの夫々の特色において開花させるある「生命」を彼らの人格の中心に与える教育者であったと云えるであろう。

第三に，彼の教育方法の特色は，制度の変革から始めるのではなくて，皮袋はそのままにしておきながら，内容を新しいものに変え，そこからやがて皮袋も新につくり変えられてゆくという方法である。従来あった倫理講話（一高）の時間の従来の修身とは全く質の異った内容の講義をするのもその一例である。更に，彼は，課外講義の時間をおいて自分の所信を述べる機会をつくる。課外活動——弁論部，読書会などを奨励し，学生たちをして自発的に人生の目的や意義，学問することの根本的意味などを追求させることを通して学生自身が新しい思想の持主になり，そこから思想運動が学生たち自身によって起って来る。週一回の面会日を定期的に持つことによって小グループでの personal な話しあいの機会を持つ。大学生と労働者というような異階層の青年たちの共働と人格的交りを通しての相互教育等々が見られる。

そして，最も重要なことは，彼自身がその思想を典型的に生きる人間であり，そうした教育法を破綻なく実践し，体現することの出来る教育者であったということであろう。（未完）　　（本学助教授）

この小論を書く上に，新渡戸稲造の研究に関しては，前田多門，森戸辰男，矢内原忠雄の諸先生方よりお話をうかがう折を得，また，資料に関しては，新渡戸琴子氏，石井満氏，宮部一郎氏夫人重代氏，青山なお氏（東京女子大学），一色義子氏（恵泉女学園），平川正寿氏（フレンド女学校），森本武也氏（東京文化短大），高倉新一郎氏（北海道大学），石田道子氏（北海道放送，ＩＣＵ卒業生）らに一方ならぬお世話になった。心からのお礼を申上げたいと思う。

Educational Thought and Activities of Nitobe Inazo

(English Résumé)

Kiyo Takeda Cho

In the development of educational thought in modern Japan, the predominant emphasis was nationalistic and utilitarian. However, if we closely examine the trend of educational thought and activities which contributed to promote and realize the respect of individuality or development of personality, we find a few peaks, such as (1) the concept of human right advocated by Fukuzawa Yukichi and other thinkers of the period of *Bunmeikaika*; (2) Christian concept of man as expressed in the education of Christian (mission) schools, most of which were started by the middle of Meiji period; (3) liberal education during the period of Taisho Democracy; and (4) the post war democratic concept of education expressed in the Basic Law of Education which replaced the Imperial Rescript on Education.

In this picture I find Dr. Nitobe Inazo (1862–1933) as an unique and significant figure. Having been a product of Sapporo Band, one of three fountain heads of Protestantism in Japan, he was the promoter and leader of the liberal education of the period of Taisho Democracy. At the same time he represented the indigenous root of democratic thought which helped to undergird the reformation of education in the post war Japan. Among those educators and scholars who have played decisive roles in the democratization of education are found an impressive list of Nitobe's desciples.

Dr. Nitobe was known world-wide as the author of "Bushido" and many other books. He was a great Christian leader who has contributed much to international and intercultural understanding as a "bridge over the Pacific Ocean". His way of bridging the Western and Oriental culture, or Christianity and the Japanese mind, was unique, being similar to but somewhat different from syncretism. His personality and insight suggest an unique pattern in the attempts for the modernization of Japan.

This article constitutes a part of my study on his thought in general and deals with the significance of his educational thought and activities as a great reformer of government higher education, as the first president of Tokyo Woman's Christian College and supporter of many other girls' schools, as the founder of a night school for young laborers as well as popular author and lecturer of national fame.